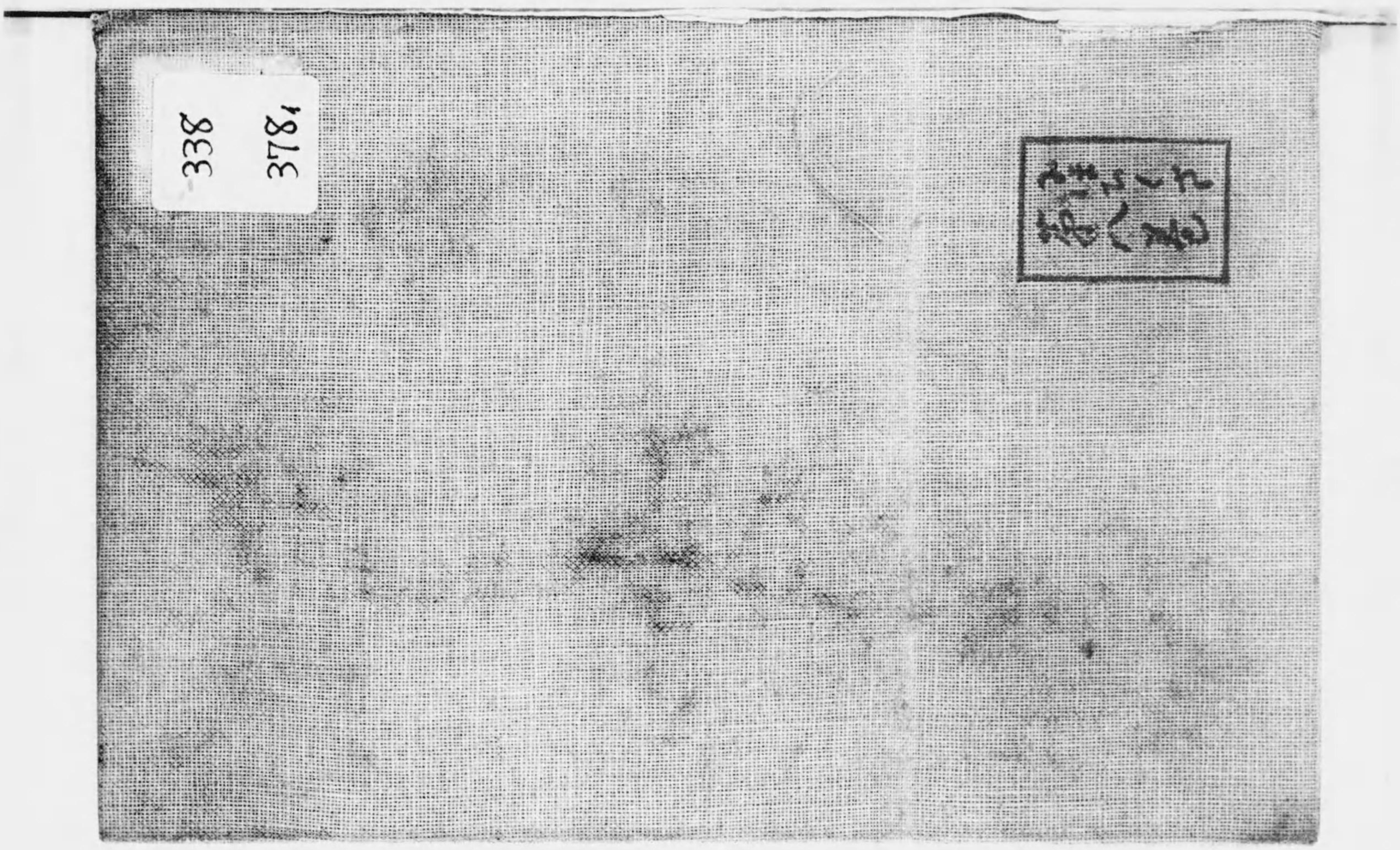
338
378



貼

白石さまの詩集

338-378/1

序文

眞面目に自分の道を歩む者は、どんな先覺者のいつた道を聞いても、それが自分のゆくべき道だとは思はれないのである。それが勝れた道だと思うてみても、異りたる時代と場所と肉體と精神とを持つてをる者の事とて、その通りにゆく事ができないのである。概念的に道を考へてをる人には、人間の道とか、一般倫理とかいふ事もあらうが、眞實に自分の歩みゆく道を求むる者にはこんな道はいくらあつても、それは自分の道でない事がわかります。こゝに常倫を超出する道が

個性の上に開かれねばならぬのであります。

本書に錄したるは、普遍倫理の否定と個性の上に築かるゝ嚴肅なる道德とを絶叫したのであります。尤もその折々に斷片的に書いたものだから、所謂系統のある書ではないが、でも各文の間に私の所信が一貫してをるのであります。この書によりて、私は私の常にいふ所の道とは何ぞやといふ事を明かにした積りであります。

大正十一年九月七日　京都にて　敏

第一章　常倫を超出する者

一

私は澤山の人の前に立つて話をすることの多くの機會を持つて居ります。講壇に立つて澤山な人達の顔を見渡す時に、それが百人居らうと千人居らうと一つとして同じ顔のないといふことに多大の興味をもつて居るのであります。旅をする機會の多い私は、多くの旅行者を見ます、さうして彼等の一人々々が異つた顔をし、異つた風彩をして居るのを見る度に妙だなあと一人で思うて居ります。色々の家庭に入り込み、色々の人に遭うてその家〳〵の内情を聞きその人〳〵の境遇やら生活氣分やらを聞いてみると皆んながそれ〴〵異つた趣きを持つて居ります。私はこんなことを見聞する時に、多の世界といふことを思はずに居られません。これらの澤山の人達は、多種多樣な姿をして居るが皆んなそれ〴〵大切な自分を把持し、または把持しようと努めて居るのを妙だと思ひます。男あり女あり、青年あり、老年あり、

教育のある者あり、教育のない者あり、色々の人達が、各自に、大切な自分を持つて居るのであります。男は男で、女は女で、青年は青年で、老年は老年で、教育のある者は教育のある者で、教育のない者はない者で、それ相應に大切な自分を持つて居るやうであります。私が大切な自分を所有して居るやうに、何億萬の人間も皆それぞれ大切な自己を持つて居るのであります、これを思ふと何だか賑かな氣もします。

澤山な人の顔をみて、自分の顔を思うてみます、誰れだつて自分の顔が誰れの顔より美くしいと思うてゐる者はあるまい、他人と比べてみてあの人のよりも美くしいと思つたりあの人よりも醜いと思ふたりすることはあります、それが美しからうが、醜くからうが一番大切な顔はごの顔だと考へてみると私自身の顔が、美醜を超越した顔だと思ひます。多勢で寫眞などをとつて、それが出來上つてきた時に、誰れの顔を一番先きにみるか、私は眞最初は私自身の顔をみようとします、多くの人

も皆そのやうです、自分の顔が美くしいからみたいといふのではなくて、なんとはなしに自分の顔が懐かしいのであるらしい。それがどんな顔であるにしても、自分の顔が一番好きで一番懐かしいのであります、時によると自分の顔でも厭やで〳〵たまらぬ時もないではないが、而もその嫌ひな中から好きで〳〵ならぬ心が湧いて居ります。餘り自分の顔に感心しない折には誰れかの顔と變へてみたらどうかといふことを考へてみます。釋迦のやうな顔、耶蘇のやうな顔、シーザのやうな顔、ナポレオンのやうな顔、ダンテの顔、ゲーテの顔、その他いろ〳〵の人の顔を持つてきて、自分の顔とかへたらどうかと考へてみるに、私はごの顔と變へることも好まないのであります。一部分づゝならば變へても好いと思ふこともあります。例へば私の頭は禿げてゐますから毛があつてほしいと思ふたり、私の眼が強度の近眼だからもつと好い眼が欲しいと思つたりするやうなことはありますが、全體としてみると誰れの顔とも變へることが厭やであります。私には私の顔でなくては承知の出來

ないものがあるのであります。我が子の可愛いのは美醜を超越してゐると申しますが、それ以上に自分の顔の可愛いのは總てを超越して居るのであります。

婦人の方などは毎日鏡に向はる丶樣です、毎日鏡に向うて自分の顔をみるといふことは餘程自分の顔に對する自信がなくてはならぬのであります。鏡山といふ芝居に出てくるぬいといふ女は、自分の醜い顔をみるのが厭だというて一生鏡を手にしなかつたと傳へられて居ります。かうした人は餘程稀なやうであります、こんな人でもその顔を誰れのと變へてよいかと考へてみる時に、誰れのとかへてよいと思ふ者はまづあるまいと思はれます。

二

私達が自分の顔について考へることは、やがて自分の性格について考へることではあるまいかと思ひます。性格といふものも概括的に人間の性格とか、日本國民の

性格とか、英國民の性格とかいうて居るのですが、仔細に觀察してみると、人の顔の異つてゐるやうに人の性格がみんな變つてゐる、萬人萬樣というてもよいのであります。血を分けた親子であつても兄弟であつても、そこに多少な似寄りがあるにしても、一人々々は異つた性格を持つてゐるのであります。古人が「性は不改を義とす」といつてゐるが私もさうしたことを思はせられて居ります。人間の性格には先天的に定まつたものがあるといふ　あの五性各別說を立てた護法菩薩の考へなども大に味ふべき點があるやうであります。人の顔を見て色が白いとか黑いとか、眼が大きいとか小さいとか、鼻が高いとか低いとか、齒並がよいとか惡いとかいふことで概括出來ないこともないが、實際はさうしたことで概括出來ない微細な相違を持つて居ります。人の性格だつて泣きつぽいとか、怒りつぽいとか、笑ひつぽいとか分けて考へたり、あの人は意志の强い人だとか、あの人は理性の明かな人だとかあの人は熱情家だといふ風に概括的に考へられないこともないが、仔細に觀察する

時には一人々々が違つた性格を持つて居るのであります。諺に「持つて生れた性分」だとかいうてゐるのはこの性格の根強い差別をいうてゐるのではあるまいか、佛典に業と云ひ、或は宿命というてゐるのは、この各自が持つてゐるところの性格、卽ち萬人萬樣の個性を言うて居るのではあるまいか。

自分の個性に就て考へてみる時に、その美はしさを感じ、或はその醜くさを感ずることはある。併しこの全體としての自分を誰れのやうになつたらばよいだらうかと考へてみると、先きの自分の顏が誰れの顏のやうになつても滿足出來ないやうに自分の性格も誰れの性格のやうになつたつて滿足が出來ないのであります。

三

自分の個性が全く自分以外のある個性に成り得ると考へたり、又は成らうと望んだり、進んでは人の性格もどうか改造しうるやうに考へたりしてゐる嚢があります。

それらの人達の間に、所謂宗教だとか道德だとかいふことが八釜しういはれてゐるのであります。

自分がこんなものであると定めたところの神に成らうとしてゐる人があります。自分がこんなものであると定めた佛にならうとしてゐる人があります。自分がこんなものだと定めた人間に成らうとしてゐる人があります。かうして自ら神にならうとしてゐる人は萬人を神にしやうと努めて居ります。自ら佛にならうとしてゐる人は萬人を佛にしやうと努めて居ります。自ら人たらんと欲する人はその「人」に萬人を導かうと欲して居ります。そして此等の人の間に、神になる道とか、佛になる道とか、人の人たる道とかいふやうなことが案出されて居ります。

力ある人は、律法を守ることが神に到る道だというてゐます。或る人は信ずることが神に到る道だというてゐます。ある者は修業に依つて佛になると申します。ある者は信仰によつて佛になると申します。そうして斯樣なことが比較的に眞面目に

考へられたり、語られたりして居ります。併し、かうしたことは、單なる頭の遊戯である間はどうでもないが、實際になつてみると、それが到底不可能なことであるといふ所に到着します。それが神であらうが、佛であらうが、人であらうが、自分以外に、自分のなるべき標準を定めた時には何時でもその人は、その目的に副はない人となり終るのであります。それは所謂罪惡といふことになります。神にならうとするから神になれない罪惡の自分だといふことを感じなければならない。佛に成らうとするから佛になれない罪惡の自分といふことを感ぜずにはゐられない。人に成らうとするから人に成れない罪惡の自分といふことを感ぜずにはゐられない。私達に、移るべからざる個性のあること、改むべからざる性能のあることそのことが罪惡といはねばならぬのであります。性格が業であるといふた、それに理想主義的の色彩が加はる時に性格は罪惡であるといふことになるのであります。で眞に自己の個性に眼覺めたものは神にも佛にも人にも、自分以外の何物にも成れない自分と

いふことに逢着します。罪惡深重のいたづらものはこの自覺の内容であります。だから罪惡の根元は移るべからざる自分が、自分以外の或る者に成らうとする、そこに萠芽を發して居るのであります。普通に殺すことや盗むことが罪惡とせられて居るけれども罪惡の根元はさうしたことではなくて、自分以外に自分の思想をもち、ある標準を定めることが罪惡の根元なのであります。祭るところの神があつたり、佛があつたり、人があつたり、或はそれ等に到るところの律法の道があつたり、思索の道があつたり、信仰の道があつたりするからして、さうすることの出來ない罪惡の自分といふものがあるやうになるのであります。その神が無くなり、佛が無くなり、人が無くなつて、それらに到る律法の道も思索の道も、信仰の道も無くなつたところには最早や、罪業深重のいたづらものといふ者もゐなくなつたのであります。

私達に罪があるといふのは、私達が神とか、佛とか、人とか、その他眞實とか、

實相とか、理想とか、いふやうなものを持つて居る罰なのであります。そんな自分の個性でない者のすべてを振り離したところには罪惡といふものはないのであります。

四

耶蘇のやうになりたいと思うてゐる人や、耶蘇のやうに人を育てねばならぬと思うてゐる人が、耶蘇教といふ團體をつくつて居ます。釋迦のやうになりたいと思ひ、なるのが本當だと思ひ、人をも然うせしめねばならぬと思ふやうな人がより合うて佛教といふやうな團體をつくつてゐます。フランシスのやうになるのが本當だと思つてる人はフランシスカンといふ團體をつくる、マホメットのやうになるのが本當だと思つてゐる人が、マホメットといふ團體をつくる。親鸞のやうに成りたいと思つてゐる人が、親鸞教徒といふ團體をつくつてゐる。日蓮のやうに成りたいと思つ

てゐる人は日蓮宗といふ團體をつくつて居る。これらのものが宗教と呼ばれてゐます。

斯うした團體に屬してゐる人達を宗教信者と稱へて居ります。斯樣な人達は皆んな自分が或る者になれると思ひ、なりたいと思つてゐる人達ばかりであります。なりたいと思つてみると、なれないことに氣づきます。成れないことに氣づくときに自分は詰らぬからなれないのだと感ずるやうになります。そして自分は罪惡の徒であると考へるやうになります。だから、どんな宗教の集りに行つてもそこに集つてゐる誰も〳〵が皆んな私は罪人である〳〵といふて居ります。ところが可愛い自分を持つてゐる人々はどこまでも自分が罪人だと落ちきつてゐることが出來なくなります。そこで彼等は自分ではなれないけれども神の力で或は佛の力でなれない者を成らして下さるといふことを考へ出し、それに救濟といふ名前をつけて、一度感じた罪惡といふものを逃れやうといたします。自ら神とか佛とかいふ標準をたてゝ罪

人といふものになつた人達は、さうして、かゞんで居れない心から、その神や佛に救濟といふ力をつけ加へて成れぬのを成らして下さるのだというて喜ぶやうになるのであります。罪惡のものだと考へるのも自分で拵へた感じであると同樣に、救濟といふことも自分で拵へた感じでしかないのであります。

先日ある青年が私のところへ參りました。その青年に、君はどうして來たかと尋ねると私は宗教家になりたいと思ひます。宗教家とはどんなのであるかと尋ねたら先生のやうな人になりたいのですといふ、先生のやうな人とはどんな人のことかといふと、好きな本をよんだり、好きなことを云ふたり、好きなことを書いたりしてゐるのですといひました。

私は可笑しくなつてふき出しました。そしてその青年に申しました。私は貴方ではない、貴方は私ではない、だから貴方は私には成れず、私は貴方のやうに成れないのです。貴方が若し私のところへきて私のやうにならうと思ふならばそれは大き

な間違ひです。貴方は貴方自身であればよいではないですかといふやうな問答をしたことがあります。又一人の青年は、自分は先生のやうになれないといふことを苦にやんでゐたのであつたが、それが原因であつたかないかは不明ではあるが、終に何等の遺書もせずして自殺をしてゆきました。先日あるところへ參りましたらある婆さんが、御開山の御後を慕ふというてをりましたから私はその婆さんに御開山は男であり、貴方は女であり、御開山は貴族の生れであり、貴方は百姓の生れであり、御開山は學者であり、貴方は無學者であるから、御開山の後を慕つても到底同じところへ行けることではないから御止しなさいというてやりました。

またあるところへ參りましたら私は神の思召の通りになれないで申し譯がないと申して居りましたから、そんな自分でない神の思召しにならうと思ふのが申し譯ないではないか、神の思召し通りにならぬのが申し譯ないのならば蛙のお思召し通りにならぬことも申し譯ないことではないか、私は、イエスのやうにもなれないが蛙

のやうにも成れない、釋迦のやうにもなれなければ蝙蝠にもなれない、私が蛙や蝙蝠になれない、だつてそれが罪惡でもあるまいぢやないか、同時にまた、私がイエスや釋迦になれぬだつて、それがごうしたといふのだ、自分を生んで育てゝ呉れた父や母のやうになれない者が時や所を隔てた、釋迦やイエスになれてたまるものか、若しそれがなれたとしたところが、それがごうしたといふのだらうか。

人は自ら威張るために、自らを萬物の靈長といふた。彼が萬物の靈長といふたために、自分の頭に神を崇めなければならぬやうになつた。さうした神の奴隷とならねばならなくなつた。イエスや釋迦が、蛙や蝙蝠とは餘程偉いのだと思うてゐる人達は自ら高ぶらんとして自らを低めてゐるのであります。私は思ひます。昔から今日まで多くの人間が、神といふ名、佛といふ名によつてどれだけ自らを卑屈にしたことだらう。西洋の人達はゴッドといふ名の束縛から、どうしても逃るゝことが出來ない。東洋人は、神佛といふ名の束縛から逃るゝことが出來ない。昔ある坊さん

か、釋迦を殺せといひ祖師を葬れといつたことを面白いと思ひます。木像を燒いて尻をあぶつた坊さんのあつたことも面白いと思ひます。私達はイエスや釋迦を早く葬つて了はねばなりません同時にまたマルクスやカントも葬らねばなりません。

五

世の中には隨分よい加減な人間が澤山ゐると見えて、右から左へと盲目的に人の後を追うて歩いて居ります。耶蘇教が流行つたり佛教が流行つたりして居ります。五六年前の我國には日蓮が流行つてをりました。今日の我國は親鸞が流行つて居ります。二三年前の我國には大本教が流行つてをりました。今日の我國には一燈園が流行つて居ります。大本教が流行り出すと丹波の綾部にさへ行けば立派な人間になれると思ひ我も〳〵と移住して行つたものです。一燈園が流行り出すと我も〳〵と京都の鹿ヶ谷に集まつてまゐります。さうして西田天香君が便所の掃除をすれば我

も〳〵その眞似をして居ります。マルクスをいはなければ社會問題は議せられないやうに思うてゐる人があり、カントをいはなければ哲學問題が議せられないやうに思うてゐる人があります。個性の光りの強い人が一人でも出ると群集の眼はそれに眩惑して眞暗になつて了ふやうであります。そして彼等は彼等自身を忘れ、人の定めた道やら、人の行つた道やらを行かうとあせつてゐるやうであります。さうすることによつて自分自身を虐げてゐることに氣付かないのであります。こんでもない盲信者だちが集つて、キリスト教をこしらへ、佛教を拵へ、マホメット教を拵へ親鸞教を拵へ、日蓮教をこしらへ、大本教をこしらへ、一燈園をこしらへてゐるのであります。本當に靜かに落ちついて自分の道を見てゆくものは誰れのやうに成らうとも思ひません。だから誰れのやうに成れるといふ誇りもなければ、誰れのやうになれないといふ卑下もありません。從つて罪惡もなければ救濟もなく、懺悔もなければ特殊な意味に於ける感謝もありません。

六

フランス革命の起つた時分に、自由、平等博愛といふことが同時に革命黨の口から溢れて出ました。大まかに考へると自由、平等博愛といふことは一つのことのやうに聞えます。ある特權階級が他の階級を壓迫してゐる時に、その壓迫から逃れやうとする他の階級者がその差別的境遇から逃れやうとする時に平等の權利を主張して平等を叫び、均等の愛を求めて博愛を叫んだ、さうしてこの平等博愛の中に自由を得やうとしたのであります。ところがこの自由です、自由といふことは必ずしも平等を意味し、博愛を意味してはゐないのである。平等博愛といふことは餘程社會的の言葉であります。自由といふことは餘程個人的のものであります。個人の自由を得べき社會狀態が平等であり、博愛であるといつてもよいのであります。自由は主觀的なものであつて、平等と博愛は客觀的のものであるといつてもよいと思ふ。

近來デモクラシーとか民主とかいふやうなことが流行つてまゐりました。何でも民主的でなければならぬといふので、民主藝術だの民主政治だの、民主道德などゝ盛んに稱へられて居ります。先年私が沖繩へまゐりました時にある新聞記者が訪問して參りました。その人に對して私は言つたのです。「私の一番嫌ひなのはデモクラテックといふことです。平等といふことです。私は私一個人の世界を享樂してゆきたいのです。同時に、私と同樣な數億の個性といふものをも尊重してゆきたいので、それを十把一からげにゴッチャに取扱ふてゆくやうないはゆる平等の世界には滿足してゐられないのである」と申しました。唯物史觀の立場に立つて人生をみてゐるマルクス一派の人達は餘りに人間を平等に見過ぎてゐはすまいか。

七

現代の苦悶の原因は個性の自由が發展した資本主義の經濟組織が原因してゐるといつてゐる。あまりに階級的に固定してゐることが現代の煩悶の原因であるといつてゐる。現代の煩悶がさうした所から起つてゐることはその一面であらう。それと同時に、現代が餘りに機械的になつて人間の個性を無視して、人を機械のやうに使役するやうになつたことも大いなる苦悶の一原因ではあるまいか。人は自分の自由を得るために機械を使用するやうになつた。そしてその機械の爲に自分の自由を束縛するやうになつた。人は自分の自由を得る爲に財產を所有するやうになつた。さうしてその財產の所有によつて自由を束縛するやうになつた。その原因は個人の自由の保護のために發達してきたところの資本主義的經濟組織も今日のやうな固定した狀態になる時、資本を所有してる者も、してゐない者も、共に自由を束縛せられるやうになつてきたことにあるのであります。だからといつてこの資本を共通し平均して分配したところが果してそこに自由が得らるゝであらうか。個性を認めない平等的分配は却つて自由を阻害することがありはすまいか。私は今の資本主義的の

經濟組織を完全なものとは思つてはゐないが、マルクスのいふやうな共產的經濟組織も完全なものだと思へないのであります。大體人間世界に、人間の考へに依つて組織を立てるといふことが間違つてゐると思ふ。組織を立てればそれに自由の阻害せらるゝことのあるのは當然なのである。自由に近い組織は或は可能かもしれない、然し强固なる社會組織の定まつてゐるところには個性の自由が得られない事は明かな事である。

私は私自身を十人並みとして取扱はれることを好まない。私の愛人が私を一般の男の一人の男として愛するといふならばそこに私に承知出來ないものがある。數多の男の中の唯一の男でなければ承知出來ない、かうした心持の上には平等や博愛といふことはその影を消して終ふのであります。そこにはたゞ個性の自由丈けが殘されるのであります。この點に於て私は特殊道を叫ばずにはゐられないのであります。超越境を望まずにはゐられないのであります。

超人を追從したニィチエに私淑してゐた高山樗牛が、『吾人は須らく現代を超越せざるべからず』といつたことは味ひのあることであります。私共のもつてゐる個性には誰れとも同ずべからざるところのものがあるのであります。强ひてこれを同じやうとするのが世の所謂宗教であり、道德であり、政治であります。だからして眞實の自由道を希念する者に取りては凡ての宗教も道德も、政治も教育も皆有害無益なものなのであります。かう云ふことさうした個人の集まつてゐる社會は、混亂極まるものであらうといふ人がある。未だ曾てさうした社會がないのだから混亂することもしないともいふことは出來ないが、さうした個性に眼覺めた者同志の交際などを考へてみると却つて混亂がなく秩序よく事の運ばれてゆくのをみるのであります。人々各々超越の一道を行く時に、そこには痛ましい葛藤が跡を絕つのであります。世の所謂無秩序、混亂の狀態は自己の世界を有しない人達の集團に起ることであつて自分の世界を持つてゐる人の集團には決して人達が怖れてゐるやうな無秩序な混

亂はないのであります。無秩序の混亂は人を一般的に考へ、十把一からげに纒めやうとしたり、治めやうとする人達の間にのみ起るのであります。眞實の意味に於けるニヒリストには決して制度を定めなければ世の中が亂れるこ怖れるやうな、そんな亂雜な世界は決してないのであります。

八

私は佛說無量壽經を讀んで釋尊が如何に超越の道を樂しんでゐられたかこいふことを一種の驚きを以て認識したのであります。ちとくだ〳〵しうなりますが無量壽經を辿つて釋尊の如何に超越の道を讃美せられたかこいふことを明かにしたいこ思ひます。

無量壽經の序文に、長々こ此の經の對告衆に就て話されてあります。その中に『世間の諸々の所有の法に超過し、心常に諦かに度世の道に住す、一切の萬物に於て意

に隨つて自在なり』こ書いてある。人間なみを超過したこころに自由があり、自在がある。眞實の個性に眼覺めたものは獨自の世界を有して居ります。だから世間の諸々の所有の法を超過してゐるのであります。かくて彼に自由があるのであります。

斯うした自由境を得た對告衆に對して釋尊は身心に悅びを湛へられました。その御姿をお側にみてゐた阿難が卽ち座より起つて釋尊に問ひました。『今日世尊諸根悅豫、姿色淸淨なり、光顏巍々こして明かなる淨鏡の表裏に影暢するが如く威彩、顯曜にして超絕無量なり、未だ曾て殊妙なるここを瞻覩せず』こ云うて居ります。世間を超過したる對告に對する釋尊の姿が超絕し給ふここ無量であつたのであります。超過世間の對告衆に對する釋尊の超絕無量の御姿が面白いではありませんか。釋尊はごうして今日斯樣に超絕した御姿であるかこの阿難の問ひに對して、今日は我が世に出でた本意を達したのであるこいうて、如來の定慧は究暢して極りなし、一切の法に於て自在を得たり『阿難諦かに聽け、今汝が爲めに說かん』

自分の自在道、超絶道を表現する爲めに釋尊は今一つの物語をせられます。その物語の主人公を阿彌陀佛と申します。釋尊はこの阿彌陀佛といふ一人格者の上に超越道、自在道を遺憾なく表現してゐらるゝのであります。

昔むかし、その昔、その又昔に錠光如來といふ御方があつた。次に光遠、次に月光等の佛があつて最初の佛を世自在王佛といつた。その時に國王があつて、佛の說法を聽いて心に悅びを懷き、たづねて無上正眞道の心を發し、國を捨て王を捨てゝ修業者となつた。その人を法藏といふた。この人は高才勇哲にして世と超異してをつたというてゐられます。法藏菩薩の素質が高才勇哲にして、世と超異してゐたのであります。世に超異してゐた法藏は無上正眞道の心を發したのであります。この菩薩が師匠の世自在王佛の前に行つて、佛を讃嘆しつゝ自分の中心願望を述べられました。その頌文を嘆佛偈と呼んで居ります。その偈文の最初に先づ師匠を讃美し

『光顏巍々にして威神極りましまさず、かくの如きの焰明ともに等しきものなし、

如來の容顏、世に超えて倫ひなし』と云うてゐられます、これは佛の容貌にはつきりと個性のあらはれて居る姿をいふものであります。與に等しきものなしといふことが世に超えて比ひなき所以なのであります。次に自分の願ひを述べて、『願くば我れ佛とならんに正法の王と等しからん、生死を過渡して解脫せざるはなからん』というてゐられる。過度の道、解脫の道、これが法藏の求めた道であつた。法藏は重ねていうて居ります。『我をして佛とならしめんに、國土は第一に、その衆は奇妙に、道場は超絶し國泥洹の如くにして等雙なからん』というて居ります。第一といひ、奇妙といひ、超絶すといひ、等雙なしといふところに唯一の道があらはれてゐるのである。獨自の境地が示されてゐるのであります。

九

法藏菩薩が頌文を述べ終つてから再び世自在王佛に對して申さるゝやう、『私は無

上正眞道の心を發しました。でも、この心を成就する方法が明かでありません、あなたは學識が廣うありますから、多くの人達がこの心を成就して行かれた經驗を話して下さい、さうしたらば私はそれに習うてゆかうと思ひます。その時世自在王佛はさういふことは人に聞くべきことではなくて『汝自ら當さに知るべきことである』と、さういはれても法藏はまだ明瞭でなかつたから、貴方の仰やることは弘深にして分りません、どうか詳しく聞かしてください、と申されました。すると世自在王佛はどこまでも止まないその志願の深廣なることに感じて初めに申されました。『たとへば大海を一人の人があつて計量するに數千萬年を經て、底を窮めて、その妙寶を得べきがやうに、人あつて、至心精進にして道を求めて止まずんば當さに尅果すべし、何の願か得ざらん』と語り次いで、二百一十億の諸々の佛達の心願と國土との有樣を語られました。これを聞き終つた法藏菩薩は無上殊勝の願を超發したと書いてある。『その心寂靜にして志着する所なし、一切世間能く及ぶものなし』と記さ

れてある。この無上殊勝の願を超發したる、超發といふところに面白い味ひがある。無自覺な雷同的根性のものであるならば、數多の佛達の進んで行つた道を聞かされて、自分は何の人のやうに成らうとか、何の人のやうにやつてゆかうかといひたいのだが、深く自分を見るところの法藏は決してさうはいはなかつた。その心寂靜にして志し着する所なし。どんな人のいふことを聞いても、わしはあの人のやうになりたいとはいはない、世自在王佛の後を行かうとはいはない、光遠佛の後を行かうとはいはない、月光佛の後を行かうといはない彼は自分の道を行かうといふ願ひを發した。そこが超發といつた所以なのであります。法藏は、今日の釋迦の後をゆく佛教徒、イエスの後をゆくキリスト教徒、マホメットの後をゆくマホメット教徒、日蓮の後をゆく日蓮教徒、親鸞の後をゆく親鸞教徒といふが如き浮薄な雷同者ではなかつたのであります。

法藏菩薩は世自在王佛の勸めによつて、公衆の前に立つて自分の願望を述べまし

た。それが四十八あります。その四十八願から超こいふ字を拾ひ出してみませう。

第九の願に『設ひわれ佛を得たらんに、國の中の人天、神足を得ず一念の間において、下、百千億那由他諸佛の國を超過する能はざるに到らば正覺をとらじ』と第二十二の願には『恒沙無量の衆生を開化し無上正眞の道を立せしめ、常倫を超出せしめん』というてゐられます。この常倫を超出するといふことも面白いことであります。常倫といへば十人並のことであります。常は常識であり、倫は倫理であります。この常識を超え倫理を出でしめるといふところに面白い味ひがあります。又第三十二の願には、自己の國の香氣の高いことを『一切の萬物、皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成す、嚴飾奇妙にして諸々の人天に超ゆ』第三十三の願には、『設ひ我れ佛と得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類ひ、我が光明を蒙りその身に觸るゝものは心身柔軟にして人天に超せん、若し然らずんば正覺を取らじ』というてある。人天を超過するといふところが着眼すべきところである。

四十八願を仔細に見覈すれば、どの願もどの願もこの超の意味のない願ひはないのであります。

この四十八願を述べ終つて、重ねて三つの誓ひをのべられます。その偈頌を三誓の偈といふ。その偈文の最初に『我れ超世の願を建て、必ず無上道に到らん、我れ佛道を成ずるに至れば名聲十方に超えん』というてあります。この超世の願ひといひ、名聲十方に超えんとある處に、第一人者の姿があらはれてゐるのであります。

斯樣に願ひを建てた法藏がその願ひの道を歩んでゆく姿を釋尊は詳しう說いて居られます。その中に『斯くの如きの大願は、誠諦にして虛しからず、世間に超出するといひ、或は修するところの佛國恢廓廣大にして超勝獨妙なりといひ、此の如きらのことは、諸々の天に超えて、一切の法に於て自在を得たり。といひ、淸淨の莊嚴は十方一切の世界を超踰す』といひ、佛の國の池を讃嘆しては各々皆一等なりといひ、その國の人達の容態の端正なること超世希有なりともいうてある。

十

無量壽經の下卷に至つては、法藏菩薩が阿彌陀佛といふ佛に成られた姿が詳しう說いてある。その中に阿彌陀佛を最勝の尊といひその智を讃嘆して妙智等倫なしというてある。等倫無しとは卽ち獨自の智であるといふことである。求道者の生活を說いてある下に各々勤精にして努力して自らこれを求めよ、必ず超絕して去ることを得て安養國に往生せん、横さまに五惡趣をきり、惡趣自然に閉づ。道に昇ることを窮極なし、こゝに超絕して去るといひ又は横さまに五惡趣をきること書いてあるのは、矢張り第一人者の道を顯はしたものである。佛德を讃嘆する偈に『佛は法王と爲す、尊きこと衆聖に超えたり』とも書いてある。佛の世界を讃嘆しては『最も倫匹なし』とも云うてある。此他、度脫といひ、解脫といふやうな言葉は枚舉するに遑がないさうして屢々『無上正覺の心を起す』と書いてある。斯樣に無量壽經を跡づけてくる

時に、阿彌陀佛といふ佛は如何に超世希有な佛であつたかといふことも解り、釋尊も如何に超世希有の位置を讃美してゐられたかといふことが解るのである。

超出世間といひ、超出常倫といふやうな文句は、深く味はねばならぬ文句であると思ふ。私達はともすると人間の道とか、或は國民道德とか、或は男の道とか、女の道とかいふやうな、さうした普遍的な道があるやうに思うて居るのであるが仔細に考へてみる時に、さうした定まつたものは一つも存在しないのである。さうしたものが自分以外にあるやうに思うてゐるから常に自分の自由が束縛せらるゝのである。さうした何物も存在しないといふことが分つて自分一個の獨自の道に進み出ることを超出常倫とか超發無上殊勝之願とかいふのであります。

十一

唐の時代に出た善導といふ人は『女義分』といふ書物の中に、「道俗時衆等、各々無

上心を發せ、生死甚だ厭ひ難く、佛法亦値ひ難し、共に金剛心を發して、横さまに支流を超斷せよ、というてゐる。この横さまに超えるといふ横超の二字から親鸞聖人は自己の歩む道を横超の直道というてゐられます。横は横さまといふこと、超は越ゆるといふこと、横さまといふことは推理を超ゆることを云つたものであります。親鸞は、横超といふことに『如來の誓願他力なり』といふ註釋を加へて居られます。必然の大道、如來の本願、それが横超なのであります。各自が靜かに自分自身の道を精進することが横超なのであります。

十二

近來聖者の道とか惡魔の道とか凡夫の道とかいふことを云々する人がある。或はまた佛道とか人道とかいふことを云々する人もある。凡夫直入の道とかいふやうな故人の言葉から今のデモクラテックの思想に適合しやうとして凡人の道といふやう

なことをいうてゐる人もある。親鸞聖人を凡人であるというてみたり、或は聖者であるというてみたりしてゐる。親鸞は凡夫でもなければ聖者でもない、親鸞は單なる親鸞である外の何者でもない。親鸞は親鸞自身の道を歩んだので、彼は聖者の道をゆきはしない、彼は凡夫の道もゆきはしない。親鸞の前に親鸞無し、親鸞の後に一人の親鸞もないのである。私の知人のある人は、何でも自分で持つてゐるものを天下一品だと自慢してゐる人がある。人はそれを聞いて驚いてゐるのであるが、何ものだつて天下一品でないものはないのである。秀吉が天下一品であれば石川五右衛門も天下一品である。アレキサンダーが天下一品ならば田子作も天下一品である。私はある所へ行つて、私は天下一品の男ですといつたところが、後になつてあれは傲慢な男だと評して居り、あれは偉い人だと評してゐたさうです。私が天下一品だといふことは高慢でもなければ卑下でもない、私の前に私なく私の後にも私がないといふことをいつたのであります。ある所に行つたら、あなたは何宗の人であるか

と尋ねるから、曉烏宗の人であると申しました。その宗の開山は誰方ですといふから私ですというてやりました。信者は如何程あるかと申しますから、一人もないのですというてやりました。私の道は私一人の外誰れも行くことの出來ぬ道であります。私の宗教は私一人丈けの宗教であります。先日あるところへ行つたら、貴方のやうなお話をなさる方がもつとお出になりますかと尋ねたから、全世界の中に私のやうな話をするやうな者は私一人しか居ないというてやりました。頭で考へた道ならば誰もゆくことの出來るものでもありませう、誰も行けるといふことは誰れも行つたことがないといふことを表す言葉であるに過ぎないのであります。眞實道は常に常倫を超出した道であらねばならないのであります。

十三

ニイチエは、その著ツアツウストラの中に盛んに超人を讃美して居ります。第四

部の終りの方に、超人といふ一章を設けて、その中に言つてをります。『汝等超人よ、これを我に學べ、市場にありては何人も商人を信ぜざるなり、汝等そのこころに語らんとするはよし、たゞ賤民はまたゝきしていはん、我等はすべて平等なりと。

汝等超人よ、かく愚衆はまたゝきしていはん、超人はあることなし、われらは凡て平等なり、人間は人間なり、神の前に我等は凡て平等なり。

神の前にといふ、されど今やその神は死したり、されど賤民の前に我等は平等なるを欲はず、汝等超人よ、市場を去れ。

神の前にといふ、されど今やその神は死したり、なんぢ等超人よ、その神は汝等のいと大いなる危險なりき。

彼が墓に入りしより汝等は初めて蘇れり、今ぞ初めて、大いなる正午は來る、今ぞ初めて、超人は主となる。

噫我れら兄弟よ、この言葉を解せしか、汝等は怖れたり、汝等の胸は眩暈を感じ

たり、深潭はこの處に汝等に向ひて口を開くか、地獄の犬は此處になんぢ等に向ひて吠ゆるか。

いざ〳〵汝等超人よ、今や初めて人間の未來の山は産褥に就て、神は死したり、今ぞ我等は超人の生れんことを欲ふ』

またニィチェは言うてゐる。汝等超人よ、超克せよ、小さき德を、小さき悧巧を、砂粒の如き考慮を、蟻塚の如き誤魔化しものを、みじめなる安逸を、最大多數者の最大の幸福を。

而して汝等自ら忍受せんよりは寧ろ絶望せよ、而して實に汝等超人よ、我は汝等が今の時生くることを知らざるの故に汝等を愛す。かくして汝等はよく生くるものなればなり。

又いうてゐる。

小さき人々のかの說教者にありては、彼が人間の罪惡の故に惱ましき責を負ふこと宜しかりしならん。されど我は、彼の大いなる罪惡を、わが大いなる慰藉として享樂するなり。

ともいつてゐる。

ニィチェは何としても面白い男であつた。耶蘇國に生れて、初めは神の從僕であつた彼が、終に神は死したりと叫んで、常倫を超出した佛性の道に、生きて行つたのであります。

十四

超越するといふことは空中に登ることではない、大地を歩むことである。神の道とか人間の道とか國民の道とかいふやうな普遍的な道のあるやうに思うてゐるものは、未だ深く自分の道に沈潛したことの覺えのない浮薄なもの〻云うてゐることである。

私達はつねに、いや神の道がごうだの、いや佛の道がごうだの、國民道德がごうだの、人間愛がごうだのと、未だ曾て自分の道を眞面目に考へたことのない浮足の人から日夜に騷々しい聲を聞かされる。耶蘇教の說教者、佛教の說教者、儒教の說教者、神道の說教者、國民道德の說教者、マルクス主義の說教者、カント主義の說教者、日蓮主義の說教者、親鸞主義の說教者、これらの說教者の口からつねに普遍的な道といふものが語られてゐる。小賢かしい浮薄兒はこの說教を聞いて、自ら小說教者たらんとしてゐる。社會主義の說教者にも聞き飽いた、唯物主義の演繹論も聞きあいた、さてはダーウヰンの進化論、さてはクロポトキンの相互扶助論、引いてはアインスタインの相對性原理論、それがごうならごうだといふのだ、それがごちらがごうだつて私らにはナスビ漬一つの價値もないぢやないか、文化人とやら云ふ餘剩價値に生きるブルヂョアが遊び半分の虛論といふならば我何をか云はんやである。饑に迫つてゐるものに、盜む勿れといふ說教は何の權威を有するものぞ、渴き

きつてゐる者に、水は衛生に害あるから飲む事勿れの教は何の權威を有するものぞ、及ての說教は、ごちらへ行つてもごうでもよい者のための指導であるにすぎない。眞實にさし迫つてゐる者は說教などでごうにもならぬのである。自分の道は自分の內心が明白に決定してゆく外に何物もないのであります。

十五

超といふと、飯を食はぬことか、性慾を遠ざけることかいふやうな人のことを思ふのであるが、かうした人は、超人でなくして綱渡り者であるのである。印度へゆくと、來世の安樂を願ふために、一本足で立つて居たり、一生兩手をさし上げてゐたりするやうな苦行者がある。我國に於ても來世に天國へ行つたり、極樂へ行きたさに神とか佛とかいふ權威者の前に跪づいてゐる者がある。かうした輩の中に隨分變つたものがゐる。さういふ人間を超人と思うてゐるやうであるが、それは超人ではなく

て綱渡り者といふべきである。超人は常並の道を行かない、だからといつて殊更に人と變つた行ひもしない、超人はつねに大地の上を歩いてをります。だから超人は世のいはゆる凡夫である凡人に似てをります。しかし超人は人間は凡て平等なりといふやうな安價な哲學に安住してゐるやうな者ではありません。彼はどこまでも自分の道を歩かうとするのであります。だから超人は常に獨立者であります。天上天下唯我獨尊の人であります。右にも行けず、左にも行けずうろ〳〵してゐるのが凡人である。我はその凡人の道をゆくのである。親鸞もこの凡人の道を行つたといつてゐた人がある。右にフラ〳〵左にフラ〳〵して居るやうなのが凡人であるならば我等の道は凡人の道ではない、我道は神の道でもなければ惡魔の道でもない、我道はどこまでも我道である。我道は善惡を超えて居る。わが道は絶對善であり、價値である。實在であるこの道を妨ぐるものは實在しないのである。

十六

君の云ふやうにすれば人間に教育といふものが要らないのかと云ふ人がある。多くの場合に於て教育といふことが、先きにゆく者が自分の便利なやうに、後に來る者をこしらへやうとする努力に過ぎないやうである。親が子を教育するといふことは、自分の役に立つやうな子を拵へやうとすることである。國家が國民を教育するといふことも、その時の國家の實權を握つてゐる者が、自分の便利なやうに國民を拵へ上げやうとしてることに過ぎないのである。教育が果してかうであるとすれば、そんなものがあつたつて、なくつたつて人間自身には大した幸も不幸もない樣である。教育といふものが若し、超人が明かに自分の道に進んでゆく自信の行爲、自信の叫びそのものであるとするならば、他の者がそれを聞いて、慥かに自分の道を認識する智慧の眼を開くことになるであらう。法藏菩薩に對して世自在王佛が二百一十億

の諸佛のことを說かれた。その教訓に依つて法藏菩薩はその何れにも同じない無上殊勝の願ひを超發せられたといふ、そこに教育の眞の効果があるのである。斯うした意味の教育は物を注入する教育でもなく、その人を或る人に造りあげる爲めの教育でもない、その人がその人自身の道をみる眼を開くやうにすることである。斯うした意味の教育の必要なことは云ふまでもない、かうした教育は必要だから改めてするといふのではなくて、明かに自分の道を認識したものが、その道を精進してゆくことがそのまゝ教育になるのである。故人が、自信教人信と言つたのはかうした境地をいふたものであらう。

十七

斯樣に考へてきた時に私は最初にいふた話を諸君と一緒に思ひ出さずにはゐられなくなる。私の最も可愛いゝ顏は自分である。誰れの顏とも變へられないのが自分

である。その顏を持つてゐる自分には、たれにも代へられない尊い自分があるのである。私はその自分を明かに認識し、把持して、天上天下唯我獨尊の道をゆくのである。行くのはわが小賢しき理智の支配によつて行くのではなくして、自己の本然が行かざるを得ざらしめてゐるのである。この尊い自分を私は一切の人類の上に、一切の生物の上に見出す時に、唯一の自分の世界と、他の世界とを同時に認識するのである。斯うした自分にとりては、世の所謂征服者がやつてゐるやうな他を掠奪し、他を攪亂するやうなことをやらうとはしないのである。自分が自分の道をゆく時に自分の周圍にある者がたま〳〵自分の道を所有しないが爲に、心に攪亂を感じ苦痛を感ずることがないではない、常倫を超出した道をゆく者は、この自己を有せざる周圍の者の惱みにも胸を痛めつゝ、しかも彼等に依つて自己の道を攪亂せらるゝことなく自己の道に精進し、周圍の者も終には彼等自身の道を發見し、その道に精進するやうにと希念して止まないのであります。ですから、常倫を超出するところの

者でも決して、無自覺者が考慮するやうなさうした攪亂の世界にゐないのであります。自覺者は力強く自分の道に精進し、一切萬靈が各々自分の道に精進し、各々侵すこころなく、侵さるゝこころなく當相敬愛して佛々相念の世界を念じてゐるのであります自覺者はニヒリストであります。さうして最も、正しい社會を享樂する者であります。超出することは度脱することであります。度脱することは虛無であります。虛無は自由を意味します。自分自身を意味します。自分自身の道に精進する者は自ら太陽のやうに輝いてゆく者であります。（大正一一、七、二四）

第二章　主義の諸問題

一。新運動新思想に對する嚴重な取締

何事によらず、命がけといふことは、最も大切なことである。云ふことは易し、行ふことは難しと古來からいはれてをるやうに、口にいふたり、筆にかいたりすることには勿論すべてゞはないが、よいかげんな、いはゆる空論も尠くないやうである。いうてをる本人がそのいうてをる事を知らなかつたり、書いてをる本人が、その書いてをる事に就て、何等の了解も持つてるなかつたりするのを折々見受けるのである。

個人主義がどうだの、社會主義がどうだのと、いうてをる者は澤山をるのだが、それはどんなことかを知つていうてをる者は、いうてをる者の百人の中に一人もあるまいと思ふ。佛教がどうの、耶蘇教がどうの、宗教がどうの、道徳がどうのこい

うてゐる人は澤山をるが、大抵はそのいうてをることがわかつてゐないのが多いのである。善だの、惡だの、正だの、邪だのというてをる人に、その善とは何ぞ、惡とは何ぞ、正とは何ぞ、邪とは何ぞと、徹底的に問ひつめることはつきりわかつてゐないのが多いのである。世の中には自分もわからず、人もわからぬことをわかつたやうに喋べりちらしてをる輩が多いのである。

人間といふ動物は、隨分きいたか風な、早合點な、物識り顔するやつである。誰かゞデモクラシーを叫んでそれがはやりさうになると、われもひともデモクラシー、デモクラシーと叫び、誰かゞ國家主義を叫んで、受けがよさそうだとわれも人も國家主義、國家主義といふやうになり、誰かゞ社會主義を叫んで受けがよさそうだとわれも人も社會主義、社會主義と叫んでをるのである。國家主義の運動者に國家に就て根本の諒解のない人がゐたり、社會主義の運動者に社會主義の眞意を知らない人が澤山あるやうである。その多くは早合點の雷同者なのである。近來危險思想と

いふことがいはるゝ、その危險なのや甚だしいのがこの附和雷同の輩ぢやと思ふ。輕舉盲動をするのは、この雷同者に多いのである。群衆心理によりてわい〳〵と騒ぎたつる運動には、いつも眞劍からそれる事が多い。

自分のかいてをることの本意を知らなんだり、自分のいうてをることの本意を知らなんだり、自分の運動してをるその事の本意を知らなんだりしてをる、無自覺な、無智な輩は、みな自分に全責任を負ふことも知らない。彼等は面白半分にわい〳〵と叫んだり、走つたりしてをる場合が多い。

こんな輩を嚴重に取りしまるといふことは、社會の安寧を維持する爲めに必要であるのは勿論の事ではあるが、夫より以上に眞劍の思想や運動の發生を助くる爲めにも大切なことであると思ふ。

牢に入れらるゝのが恐ろしかつたり、罰金を出すのが恐ろしかつたりして、いひたいことをいはなかつたり、かきたいことをかゝなかつたり、したい事をしなかつ

たりするやうなら、それはいはいでもよい事、かゝないでもよいこと、しないでもよいことではあるまいか。單に新らしい事をいふたり、したりしてひとりよがつてをるやうな言論や運動は嚴重に取りしまるといふことは、眞劍のものゝ出づる爲に大切なことである。眞劍な言論を吐き、眞劍な運動をする者には夫れを束縛するものより、それに雷同附和する者の方が恐ろしい敵である。嚴重な取締りによりて、このよいかげんなやつ等の滅び去ることはどんなにうれしい事であらうか。念佛禁制は念佛奬勵よりもどんなに眞劍の念佛を勸めることであるかもしれない。

私は新思想や新運動に對して、かれもよしこれもよしと本領のない包容をしてをるよりも、どん〳〵、壓迫し、束縛して、爲政者自身の持つてをる思想を明にするがよいと思ふ。そうするとそこに眞劍な爭が起り、眞劍な爭が起るとそこに眞劍な解決も生れてくるので、社會國家はずん〳〵と進展してゆくのである。事勿れ的の包容は反つて社會を沈滯せしむるやうになる。表面はにぎやかなやうでもそれがは

やるばかりで根づよくはならぬ。宗教などは世に歡迎せらるゝ時よりも迫害せらるゝときの方が根本的に植ゑつけらるゝやうである。

眞劍な思想中心から湧いて出る思想を壓迫すればそのあふるゝ力は身體からあふれやうとする。こゝに自然に爆裂彈の運動がはじまる。口のよくきく人より、口の吃る人が腕力に、內心を表はすことがそれをよく證據だてゝをるではないか、そうすると思想を嚴重に壓迫すると根のない人眞似のいはゆる思想家は亡びてしまひ、眞劍のものは腕力か爆藥によりてあふれ出るにちがひない。そうすると嚴重な思想の壓迫は血なまぐさい革命を叫ぶ原因となることになるから、反つて危險なやうである。しかし國家や社會にはこの眞劍と、眞劍とが火花を散らして爭ふ時代でなくては本當の發展は期せられないのである。よいかげんな包容や妥協の平和は國家社會を沈滯から滅亡に　入らしむるやうになるからいけないのである。眞劍な人は、眞劍に爭はねばなりません。眞劍な爭ひができる時に眞實の進展が生れるのです。

この點で私は新思想や新運動に對しては、眞實な心からの取締りをすることは新思想家新運動家にとりても爲政者自身にとりても大切なことであると思ふのである。

戀をしてをる者に、その戀を外からせかうとする事がある。大抵の浮氣な戀ならば利害とか得失とかの風にその火を吹きけされてしまふ。道德とか習慣とかの水によりてその火を消してしまふ。然し根蔕から根づよく燃え出てをる戀ならば、之等の外部からのせきとめる力が加はれば加はる程一層その燃ゆる力をますのであり、ます〳〵純一なものになつてゆくことは、丁度精錬の火坑に鑛石を入れてきたえるやうなもので、その火にあへばあふ程、金屬は純粹になつてゆくと同じである。ですから、戀を外部から種々な力でせきとめ、妨げることは、浮氣な戀をはらひのける爲に、眞劍な戀をしてます〳〵燃えたゝしめ、堅實に成熟せしむる爲に大切な事である。

大風の多い場所にある草木の根張りのよくなるのと同じ道理である。木の根ばり

を丈夫ならしむる爲に大風の要がある。

之と同じやうな意味に於て、新思想や新運動に對して嚴重な取締りも壓迫も大切なことであると思ふ。私が空腹になつて飯がくひたいと思ふこの心は一軍團の力をもつてもどうもできないのです。私が便通を催したのが惡いからとてどんな權力をもつてもどうもできないのである。內から湧る〻思想や運動は、いかなる兵力を以ても抑へることができないのであるから、眞の思想や、眞の運動にとりては迫害は反つて自分の火を燃えたゝしむる所の薪となるのである。

キリストを十字架に殺した人達はキリストを慕うてゐる人達よりもキリストの光を放たしめたではないか。吉水の僧團の解散がなかつたり、法然や親鸞の流罪がなかつたりしたら、念佛の聲は日本國中にひろがらなかつたらう。佐渡の流罪と、龍口の法難がなかつたら日蓮の思想は今日のやうに傳はらなかつたらう。

近く私自身の上に味うてみても私は異論者、無道德漢など〻種々の誹謗の間にた

つてゐるのであるが、私は常に之等の誹謗者によりて私自身が紹介され、私自身の生命の火の薪となつてくれることを思はずにはゐられないのである。

惡む者、誹る者は、愛する者、讃むる者より以上に深刻に私を紹介し、私の命をもえたゝしめてくれる場合がある。

天理教だつて、大本教だつて、世の中の誹謗の聲が高まれば高まる程、根づよくひろまつてゆくにちがひないと思ふ。

こんなことを考へて來る時に、私は爲政者や社會の人々に新思想や新運動や新宗教に對して、尤も嚴重な取締りをしたり、壓迫を加へたりするのは大變によい事であると思うてをる。

こんなことでほろびる位のものならば滅びてもよいのだし、眞劍のものはますます眞劍にきたはるゝのだからますゝ純一に精進するやうになるからよいと思ふ。

和するも、反するも、常に眞劍であることが大切である。

どちらでも眞劍なものは殘ります。外的なものは亡びて内的なものは殘ります。大地から生れたものは殘り、手づくりものは亡びます。

眞劍な者には自分を妨ぐる力を外に認むることはできないのであります。

（大正九、一二、五）

二。主義者達へ

それが個人主義にしろ、社會主義にしろ、あらゆる主義は、人間性に基かないものはない。人間性といふよりも、人間性に對する認識に基かないものはないのである。ある人が、自分のあらん限りの智囊をしぼりて、自分の本性に對し自分の周圍の眞相に對して、研究し、その事實の認識から出發してこゝに彼自身の價値判斷を下すやうになる。この判斷が何々主義といはるゝやうになるのであります。一人が自分の價値判斷を何々主義と名けて發表すると、それに共鳴する者や、それを模倣する者やが出てまゐります。此等は主義の遵奉者といふべき人達であります。

主義といふものが、かやうにして出來あがるものとすると、一定不變の主義といふものは、あり得ないものである。なぜといふに、主義はある人がこの時の自分の

知識又は感情を以て、その時の周圍にふれ、そこに生れた價値判斷であるとすると、その人は知識又は感情に變化が來り、周圍の狀況に變化の來た折には、さきに確定した主義なるものは、最早生命のあるものではなくて、一つの概念の殼にすぎないのである。世の中の主義者には、この殼を後生大事に持つてまはつてゐるものがあります。だから、社會主義者が必らずしも、社會主義の實行者でなく、個人主義者必らずしも個人主義の實行者でなく、利他主義者が利己的生活者であつたり、利己主義者が利他的生活者であつたりすることがあるやうになる。かうなると主義者は何々主義を主張してゐるが、何々主義の實行者ではないといふ妙な事になるのである。最初に主義が生れた時には、その人にとりてはそれが自分の生活であつたのであるが、それが、その時を經ると、生活にそぐはぬものになつてしまふのである。生活は日々に進展して止まないのに、その折に生れた主義が固定してゐるのだから、主義と生活とが別れ別れになつてゆくにちがひない。

どんな主義だつて、人間の幸福といふ事を度外視することはできない。ある時に生れたある主義は、その時のその人の周圍に幸福を與ふるものと思はれてゐなくてはならぬ。尠く共、主義者その人の幸福であると信ぜらるゝものでなくてはならぬ。どんな主義だつて、その新らしくその人の上に生れる時には、その人と、その人のその時の周圍に幸福を與ふるものであるにちがひはないのではあるがその主義が固定する時に、その人の生活も變化し、その人の周圍も進展して、その主義の生れた時と、すつかり變つてしまうてゐるのに、主義だけが固守せられてゐるから、その主義は、その人に對し、その人の周圍に對して、窮屈なもの、束縛するもの、不幸なものになるのである。人間が一定の主義を有するといふことは、人間性そのものに對しては、不可能なのである。人間性は變化して止まないものであるから、人間の社會も亦變化してやまない。いつまでも一の主義を維持し、誰にでも、何處にでも、一の主義をあてはめやうとする者は、一枚の着物をこしらへていつでもそれを着、

誰にもそれを着せやうとすると同じである。そうして若しその着物が、その人に合はぬ時に、その着物をそのまゝに大切にしておいて、その人を切つたり、延ばしたりしやうとするのとよく似た事ではあるまいか。

孔子が『君子は豹變す』といふたのは、眞實の生活者には、一定不變の主義などのあらう筈がないといふたのではあるまいか。

釋尊が、諸行無常、是生滅法といひ、阿彌陀佛が、一切の法は夢の如し、幻の如し、響の如しといふたのも、這般の消息を洩らしたものではあるまいか。一切は進展する、一切は變化する。生きたものは一として變化しないものはない。人間も變化する、土地も變化する、日月も變化する、國家も變化する、宗教も變化する、道徳も變化する、法律も變化する、世の中にありとあらゆるものに變化しないものはない。だから眞實のものを、私達が、ある時に見出したとすれば、その時に眞實ではあるが、次の瞬間にはそれは眞實でないのであります。それだのに、一度發見し

た眞實をいつまでも、誰にでも、眞實性をもつてゐるやうに思ふのはこの變轉してやまない人間と社會とを知らないから、いやその變化を勘定に入れないからではあるまいか。世の中には、普遍妥當性がどうだの、永久的眞理がどうだのといつてゐるものがあるがこの流轉して常なき人の世に、どこにそんなものが存在しやうぞ。といふと二二が四といふことは、どこに行つても、誰にでも妥當とせらるゝ眞理ではないかといふかもしれぬ。二二が四といふやうな單なる數學上の命題ならば、そんな事はいくらもある、そんなカテゴリは、客觀的妥當性を有しもしやうが、それは生きたものではない、生きた人と世とには、そんな數學的眞理や、論理の假定とは一つではないのであります。そんな固定した眞理とやらがあると思うてゐるのが人間の尤も深い迷ひではあるまいか。釋尊がそんなものはないと喝破したのが、十如是といひ、眞如といはれた事なのである。眞如といふはあるがまゝといふことなのである。それを妙に固定的に執持して眞如といふものが嚴然としてあるかのやう

に思うてゐる人があるやうになつたのであります。法があるといへば、その法がすぐ固定したものであると思ふからして、阿彌陀佛は、法の性は空なり、無我なりというてゐるのである。

中江藤樹が『孝經』を講ずる時、『先王の法服にあらずば着ず』とある法服といふのを解釋して、法といふは水へんに去るといふ字をかくのであるから、法といふは水の流るゝやうに止まらぬ姿である。故に先王の法服といふのは、その時代その時代、その人その人に適應した着物の事だというてゐるのは面白い解釋であると思ふ。

生きてゐるものは動く、變る。動く、變るのは生きる姿である。この生きてゐるものゝ世界に、どうしてそんな變らぬものがあり得やう。この點で、あらゆる、固定した眞理の遵奉者も、唱導者も皆自分の生命の血の通はぬ、概念の殼を云々してゐる人達なのであります。あらゆる主義者は、この固定眞理の信者なのであるから、彼等は又、概念の執持者になり了つてゐて、決して生命ある生活者でない事は明白

であります。

最近外電の傳ふる所によると、英國の陸軍少將タムソン氏が最近露國にいつた印象記がマンチエスター●ガーヂアン紙上に載せてある。その印象記の中に、『勞農政府が、その重要な二點に於て主張を枉げた所は注目に價する。卽ち第一、經濟原理に於て、第二、政治的權力に於てゞあつて、共産主義に反して個人的企業を認可し、食物の供給や、生活必要品の分配を計らうといふのである。故にレーニン氏及び其閣僚に對しては、政治上の個人的利害を打算するよりも前に、先づ人道主義的な立場を執つた事と、今一つは單に學說遵奉者としてではなく、實際政治家として貫目を示した二點に於て信任の意を表さなければならぬ。』といつてゐるのは注目するに足ることだと思うてゐる。二三ヶ月程前にレーニンの變節が傳へられたが、やはりほんとうであつたらしい。或人々は、之によりてレーニンを誹るものもあるが、私は寧ろ之あるによりて、ます〳〵彼を愛する心がますやうであります。私有財産制度

も、共産制度も共にある場所のある人に對して幸福でもあり、眞理でもあるかもしれん。然しその主義のごちらかを固守して、生きた個人と社會とを見ないのは無理な事である。どんな、主義だつてそれを固守する時には個人と社會とを害するものである。私達は着物に合はして、身體を切りもりする愚を爲してはならぬのであります。

今の世の主義者達よ、君達は、主義が大事なのか、人間が大事なのか、古いやうな事であるが、新らしう考へてほしい。私がこんな古い事を君達に問はねばをれぬやうなことを君達は主張してゐるからであります。

私はレーニンが共産主義者であつたことを知つてゐる。人類の幸福の爲に、共産主義を主張した彼が人類の事情の變化と、彼自身の人類を見る目の變化に伴うて、その主義を裏ぎつて私人の企業を許した處置は面白いではないか。寧ろ之が當然ではあるまいか。變轉活殺常のない所に、人間の幸福な自然な道が開かれてあるので

あるまいか。レーニンがごこまでも溫かいハートの持主であることがうれしう思はれる。同じタムソンの記にレーニンとトロツキの間はます〳〵よいと記してあるのもうれしいのである。あのマルクスとエンゲルスの友情の濃厚であつた事も、なつかしい事ではないか。今の主義者達が、主義の上には、人間を見ないといふやうに、いかにも冷やかに、こけ〳〵しう、きしり合うてゐるのは、彼等自身が嫌うてゐるやうに、彼等自身が人間を機械化してゐるのであるまいか。私達は法の爲に人を見ぬといふ事よりも、人の爲に法を枉げるといふ事は、最も溫いハートの現はれたものであると思ふ。固定したる社會、概念化したる社會の人間に不幸を來すのは、それが人間を機械化する點に存するのであることは今日の主義者の痛言する所ではないか。そうしておいて、主義者達自らが、何々主義といふ固定概念の下に、生きた人間を一種の箱づめにしやうとしてゐるのではあるまいか。私はごこまでも、何等の固定した概念を持たずして、常に自由に、常に率直に、生々として、成長する人

間生活を願求し、讃美せずにはゐられないのであります。

（一〇、八、三一、城端にて）

三。最後の繫縛

弱小な私は種々なものにとらへられます。金に、名に、權に、男に、女に、いろいろのものにとらへられて、自分を見失はうとすることが度々あります。それでも之等のものは、能くはつきりと姿が見ゆるので、とらはれからはなるゝことが比較的容易である。

私が一番離れにくいとらはれは思想のとらはれのやうです。思想は時には、私自身であるやうに見ゆる程私に近いものである。それだけにとらはれてゐながら、とらはれてをることに氣づかぬ場合が少くないのであります。

佛典には我執と法執といふ事をいてある。この二つはなか〳〵去りがたいものである。思想のとらはれは法執なのである。空といへば空にとらへられ、有といへ

ば有にとらへられ、物といへば、物にとらへられ、心といへば、心にとらへられ、善といへば善にとらへられ、惡といへば惡にとらへられるのであります。

私達は何か考へつくと夫を概念化して、夫にとゞまらうとするのです。そうしてその思想の繫縛にとらへられてはなか〳〵浮ぶ瀨がなくなるのであります。

秋達が自分の前途を思うてみて闇黑のやうに感ずる事がある。こんな場合には、多くは自分の思想にとらへられてをるのであります。實際の事は、私達の考へたやうに進轉してくるのではないのだが、自分が概念的に世の中の事をこしらへて、行きつまりに、はいつてしまふのであります。

自殺者などは、世の中が闇黑になり、さしつまつたやうに感ずるのであるが、その世の中は、實際の世の中ではなくて、彼の考へた所の世の中なのである。で彼は人生におしつまつたのではなくて、彼自身の思想に行きつまつたのである。彼自身でこしらへた概念の網にひつかゝつてどうにもならぬやうになつて自殺するやうに

なるやうであります。だから他の人からみると死なんでもよいと思ふやうな事に、本人は大變な心痛をして死を急ぐといふ場合が多いのであります。自殺も亦思想の繫縛に囚へらるゝ者の當然受くべき刑罰のやうであります。

私達が親しうなりたい友人同志が、互に相よりたい心をもちながら、互に思想に隔てられて、うぶな心にだき合へない場合も多くあるのであります。

思想はそれが生ずる時には、生命の發露であるのであるが、夫が固定し、概念化する時に、それは死んだ型となるのである。その型に自分と他とをとぢこまうとする時に破綻が生ずるのであります。生命が流動した思想は尊い、しかし概念化した思想に生きた生命を流しこまうとするのは恐ろしい事であります。私達は、名や金や權力のとらはれよりも、この思想のとらはれにはいる事が恐ろしい事であります。だから私達は常に明るい眼をみはりて、常にこの思想の繫縛に足をくゝられぬやうにひたすら用心せねばならぬと思ふのであります。

思想の繫縛の恐ろしい内にも特に自分が自分だと思うてゐる思想した自分への執着であります。眞の自分ではなくて、自分だと自分の思想できめてゐるその自分の繫縛に囚へらるゝのが私達の最終のそうして最初の繫縛であるというてよからうと思ふ。すべての繫縛はこの繫縛からおこつてくるのであります。我執といふのはこんなのであります。法執と我執とはこゝに來ると一つになるやうである。我執といふのも法執の一つであるといふ事ができる。又法執は我執の一つであるともいはれる。要は自分で思想した法、思想した我に執する所の繫縛なのであります。私達はどうかこの最終の繫縛に囚へられぬやうに、いつも廣い世界を固定した思想をもたずに、任運に法爾に進轉してゆかねばならぬのであります。生きた生活をして殼となつた思想的な法と我とにくゝられぬやうに、常に解放して、延びるが儘に進轉せしめねばなりません。（一〇、一一、一六蒲郡にて）

四。道德の世界と宗教の世界

（ある人に答へて）

一

道德の世界ではどこまでも善を勸め、惡を咎める。だから我等が道德の世界にある時には、どこまでも自分をせめねばならぬ。之に反して宗教の世界では、惡人正機とあるやうに、善惡の二つ總じてもて存知せざるなりとあるやうに決して自分を責むることもなく、極めてのんびりしてゐる事ができるのである。かうなると道德の世界と宗教の世界とは、反對してゐるやうである。そうするとこの二つの世界はどんな關係をもつてゐるのであるのか。この二つの世界の關係をきかして下さい。

ある人からかうした質問書がまゐりました。これを尋ねてきた人が私の著書を愛讀してゐるといふのであるから、私の著書を愛讀する程の人がどうしてこんな愚問を發するのだらうと、はがゆく思はれるので、もつと私のかいたものをゆつくり讀んで下さつたらそんな質問は少なくなります。私は道德の世界だの、宗教の世界だの、そんな世界には住んでゐません。又住まうともしません。私は私自身の世界に住んでゐる、又住まうと思うてゐます。それが道德的だらうが、なからうが、宗教的だらうが、なからうが、そんな事はどうでもよいのであります。といふやうにざつとお答へはしておきましたが、世の中の雜誌などをみると、やはり道德と宗教の關係がどうの、宗教と藝術の關係がどうのというてゐる人も隨分多いやうであるし、特に私があの人にはこんな事があるまいと信じてゐた、西田幾多郎君でさへ、二三ケ月前の『哲學研究』に、宗教、道德、藝術の關係に就て長い論文をかいてゐられたのを思ひ出し、私としては陳腐な思ひがするが、こんな質問のあつたのを機會にし

て一言しておかねばならぬと思ひつきました。多田鼎君が、『教化』の上へ俗諦論を書いてをるのを見て、あまりにもごかしくも思ふたから、この一文を草することゝしました。

二

多田君は眞宗の俗諦の根本は『大經』の悲化段にあるのだと教化で長々とかいてゐます。師を共にして一つの道を求めて來た親友の事とて、殊更に變な氣がするのであります。眞宗の俗諦といふさへおかしいのです。眞宗、そんなものがどこにあるのかといひたくなる。

かういふと多田君はすぐに『教行信證』に謹んで淨土眞宗を案するとあるではないかといふだらうが、そんな事は百も承知してをる。それを承知しつゝ眞宗なんてものがどこにあるかと問はねばならぬ。その眞宗に俗諦といふものがあり、この俗諦の

根本が『大經』の悲化段にあるといふだからおかしくなる。先日ある所で、ある人が人間には良心といふものがあつても、わかつたやうな事をいうてゐるから、そんなものがどこにあるのですかといふたら教育の勅語の中にあるといひました。そうですか、人間の良心は教育の勅語の中にあるのですか。では明治以前の人間には良心がなかつたのですかといふたらその人は怒つたやうな顔をしてゐました。私はおかしくなつて、笑ひ出した所、その人はます〳〵怒つてしまひました。

人間には良心といふものがある之も妙な言葉である。大體人間といふものがどこにゐるのか。私がかういふとわからぬ人が多からうと思ふ。人間はどこにをるかといふは妙な事をいふものかな、そこらに澤山をるぢやないか。日本には七千萬の人間がゐるぢやないかといふかもしれん。七千萬の人間、わしはそんなものを見た事がないのです。先日もある人が來て、人生の目的はどんなものですかといひますから、人生とは何かときくと、人間の事ですといふから、人間とは何かといふと、けい

んな顔をしてをるから、人間といふそんなものはどこにをるのかときくと、私のやうなものが人間ですといふから、では私の目的はどうですときくがよいといふと、それぢや私の目的はどんなものですかときくから、馬鹿だねというてやりました。この問答もわからん人が多からうと思ふけれども、能く考へて貰ひたいのです。

眞宗といふわけのわからぬものに、俗諦といふわけのわからぬものがあり、このわけのわからぬものゝ根本が『大經』の悲化段にあるといふのだから、おかしい、いやおもしろい。人間の良心が教育の勅語の中にあつたり眞宗の俗諦が『大經』の悲化段の中にあつたりするのは、金米糖が壜の中にあつたり、水が桶の中にあるといふやうな事なのでせうか。

眞宗といふものはこんなものだときめ、その俗諦とはこんなものだときめ、そうしてそれが『大經の』悲化段の中にあるときめるのだから誰がきいてもお尤もと思ひませう。でもそんな事は論理の遊戯でしかないのではあるまいか。私はこんな議論

をきくと、それがどうしたのだ、といひたくなるのであります。わが親愛なる多田君がどうしてこんな事を今更きめていうてゐるのだらうかと殘念でたまらぬのであります。

三

『善の研究』や『自覺に於ける直觀と反省』の著者としての西田君。いや知人としての西田君は私の敬意を表する人である。體驗といふ事を日本の思想界に重要な要素と思はしめた第一人者である西田君（體驗といふ造語は恐らく西田君のこしらへたものだらう）が『哲學研究』に道德、宗教、藝術の關係を細々と辯じてをらるゝのを見、私は、それが西田君丈けに、特にこの人までがこんな事をいうてゐるのかと思ふた。シーザが『おゝゆうあるぶるうたす』と叫んだ時の樣な氣持がしたのであります。

昔からの哲學者といはるゝ人のかいたものを見ると形而上學だの、形而下學だの、道德だの、宗教だの、藝術だのといろ〳〵と部門をわけて、それ〴〵の概念を說明してをるやうである。ソクラテスには宗教だの道德だの政治だのといふものはなかつた。プラトンに至りてもまだあんまり概念的にならなかつたがアリストートルに至りて、倫理學ができ、形而上學ができ、政治學ができるやうになつてきた。こゝに概念の取扱ひとしての哲學が盛になつてきたのである。

私は『哲學研究』に西田君が宗教、道德、藝術の根本に就て語られた内容に就て彼此いうてをるのではなくて、君があの論を草する態度をあきたらなく思ふたのである。道德だの、宗教だの、藝術だのとそんなものがどこにあるのか。道德はこんなものと定め、宗教はこんなものと定め、藝術はこんなものと定めて、之が關係をつけやうとしてゐる西田君の氣持ちが知りたいのだ。モラリティとか道德とかいふ言語の註釋、レリジオンとか宗教とかいふ言語の註釋、アートとか藝術とかいふ言語の註

釋をしてゐるのだといふのならば、私はそうですか、大學の講座にはそんな仕事もあるのですかといふより外はないのだ。西田といふ一人の人が、自分の眼で、道德といふ言語、宗教といふ言語、藝術といふ言語の持つ概念を驗して、それを自分の思想上の茶棚にしまひこまうとする所の議論であるといふのなら、私は何もいふ事を要せぬのであります。砂糖と飴と金米糖の關係を論ずると同じやうな議論として、宗教、道德、藝術の關係を論ずるのなら、私は何もいふ事はないのである。私はそんな議論を聞くと、それがどうしたのですかといひたくなるのです。

宗教はかうだ、道德はかうだ、藝術はかうだ、あるひは宗教はかくなるべきだ、道德はかくあるべきだ、藝術はかくあるべきだといふ言葉の空虛な事を私は能く考へて貰ひたいと思ひます。

四

野依秀一君が、『野依雜誌』といふのを出してゐる。それに近頃『眞宗の世界』といふ雜誌を出してをる。野依秀一の外に眞宗があるのらしい、外にないのなら野依雜誌でよかりさうなものだに外にある眞宗、それに世界があるのだからおもしろい。

そういへばどこかに『基督教世界』といふ雜誌が出てゐました『加特世界』といふ雜誌が出てゐました。新聞や雜誌を見ると、佛教界ではどうの、基督教界ではどうの、いや文學界では、いや哲學界ではなどゝいふ言辭を屢々見受けます。『實業の日本』があつたり『實業の世界』があつたりするのですから、おもしろいのです。概念の世界では、そうしたものは、いくらでもあらうが、そうしたものはどこにもあり得ないのであります。

よく佛教ではかういふの、キリスト教ではかういふの、眞宗ではかういふの、禪

宗ではかういふのと鹿つめらしくいうてをる人があるからおもしろい。佛教、そんなものがどこにあるのか、キリスト教、そんなものがどこにあるのか、眞宗そんなものがどこにあるのか、禪宗そんなものがどこにあるのか、あまり粗雜ないひ分ではないか、禪宗といへば鶴見の總持寺を思ふたり、鎌倉の圓覺寺を思ふたり、京の建仁寺を思ひ出す人が、禪宗は京にあつたり、鎌倉にあつたり、鶴見にあつたりすると思うてゐるのであります。眞宗といふと本願寺の宗旨ぢやと思うて何の怪む心も持たないざつぱな頭の人には、眞宗の道德の、眞宗の信仰だといふたちちつとは、何とか思ひもしやうが、もつと眞實を考へてゐる者にとりては、たゞおかしくなるばかりであります。

どうしてそれがおかしいのかといふのですか。そうです。あんまりそれが粗雜ないひ分だからなのであります。

どうしてそれが粗雜だといふのですか。そうです。實業ばかりの日本もなければ

實業ばかりの世界もないからである。日本に實業もあれば文學もある、政治もある、種々の事があつてもそのいづれの一つでもないのであるからです。

五

話が大分横道にそれたやうだから、改めて始めの問題に歸る事こいたしませう。道德の世界こいふのが、果して善惡の二つをわけて、ごこまでも自分を責めるものであり、宗教の世界が、善惡の差別を見ずして、總てをいだくものだこすれば、まるで反對なものである。だからまるきりちがつたものであるこはいふまでもない事である。いふ所の道德の世界こいふのも概念の世界ではあるまいか。宗教の世界こいふのも概念の世界ではあるまいか。二つの異りたる概念世界の別々であるこはいふまでもない、此二つの概念の世界の同や異を問ふのが問へる人の所存でなくて問ふ人はこれを自分の世界こして考へたいからであるこ思ふ。

自分の世界こして考へるには、道德の世界だの、宗教の世界だのこ面倒臭い概念に囚へられないで、直接に自分の世界を開いて進んだらよいぢやありませんか。自分以外の道德の世界なごごうでもよいではないですか。自分以外の宗教の世界もごうでもよいではないですか。そうしてこの二つの關係なんかごうでもよいぢやありませんか。自分の世界が善惡の二つをたてゝごこまでも惡を責めてゆく世界なら、それでもよいではないか。自分の世界が善惡を超えた世界ならそれでもよいではないか。ごちらの世界が正しいこいへるものではない。私共は自分の世界を開けばよいのである。自分を責めるなら責めるもよからう。自分を赦すなら赦すのもよからう。ごちらにしてもそれが自分のものでなくてはならぬのである。自分を責める世界にゐるこ思うて、自分を赦してゐたり、自分を赦すこ思うてゐて自分を責めてゐたりするやうな矛盾した事のないやうにありたいこ私は思うてゐます。

道德がごうでも、宗教がごうでもよいぢやないですか。その二つがごう關係があ

つたつて、ないだつてよいぢやありませんか。私共は、自分の道に進めばよいのであらうとおもふ。

六

私は之から、もう一歩進んで考へてみたいと思ひます。

私自身の心の中に、善惡をわけてみる心はないか。そうしてどこ迄も善を好み、惡を責めやうとする心はないか。たしかにそんな心持ちもあります。では善だの惡だのというてゐられない程に自分がかわゆうて抱きしめる心はないか。確にそれもある。ではこの二つの心のどれがほんたうの自分の心であらうか。そうしてこの二つの心はどこまでも無關係なものであるだらうか。

私は道德だとか、宗教だとかいふ名をつけたものでなくて、かうした自分の心持の上の研究をしてみたいと思ひます。

私には善惡とか正邪とかと二つにわけてものを見る心がある。そうして惡と思ふものを拂ひのけて、善と思うてゐるものにつかうとする傾向がある。そうして、知の上で惡と思ひ、之を去らねばならぬと思ひつゝ、實際ではいつの間にか、それを選んでやつてをる場合がある。こんな時に悔恨の情が起きる。そうして懺悔の心が起る。これからもうこんな事をすまいといふ心が起きる。そうして又それを犯す事がある。幾度も懺悔し、幾度も犯す事がある。かうした事が度重なる時に、この惡をも咎めないものを自分以外に一つ求めずにはゐられなくなる。夫れに神とか、佛とかといふ名をつけて、之を後だてとして懺悔しても、懺悔しても、改まらぬ自分の心のかくれ場をきめやうとします。そのかくれ場所ができると、善惡を超えた心が味はるゝやうになります。心のすゝみはかうした順序をへてゆきます。ですから、善惡をわけてみる心と、善惡を超ゆる心とは決して兩立はしません。一つが心に現はるゝ時には、一つがなくなつてゐるのであります。

私共にものを二つに別けて考へる心の生るゝ根源は、自分に對する他を認むることから起きるのであります。主觀に對する客觀を認めるのが、善惡を考へ、邪正を考へる本になつてをるのである。善とは自分に名け、惡とは他に名けた名ではなからうか。善を求めて惡を去ることは、深い深い心の底をしらべてみる時には、他を去りて、自につくといふ事ではなからうか。客觀を去りて、主觀につくといふ事ではなからうか。かくて主客を超えた一念に到達する時に、私の心には善惡を超えた心が起つて來るのではあるまいか。善惡を超えた心とは、主客を超えた心であり、純一な根本主觀であります。

この根本主觀が、具體化して、表現さるゝ時に、それが依然として主觀そのまゝであるのに、之を客觀視して、再び二つに考へやうとするのです。自分が眞劍の生活をやつてゐる間は、こんな二分される心、卽ち迷惑する心がおきて來ないのであるが、生活にたるみができると、自分を離れ、自分の生命を離れて、客觀的にものを

見やうとする、そこで、眞實の自己は、自己を保存する爲に、善惡判斷の眼を開いて、惡を去つて善につくといふ心の中に、他を去つて自につき、客觀を去りて、根本主觀に歸へらうとするのではなからうか。かやうに見る時には、善惡を判別し惡を去りて善に就かうとする心そのものが、眞實の自己に到着する道程であるやうに思はれます。清澤先生が『善惡の思念によれる修養』といふ一文を草せられた事を思ひ出します。そうして又、親鸞聖人が、善を好み惡をにくむ心を定散自力の心と貶しめつゝ、而も之を要門といはれた心持ちが思ひ出されます。要門です。眞實に達するには肝要な門です。然し之は堂奥では決してありません。堂奥に達したものにはこの門はいらなくなります。

私などは、やはりこの順序を經てきたのであります。始めは善惡の思念に沈み、自分を責めたてゝ、自分をさいなんで、この終極に達して、こゝに責めてゐた自分が自分でなくて、責められてゐた自分が自分であつた事に氣づいたのであります。

卽ち善惡の價値の顚倒を來したのであります。かくて私は、善惡の二分に煩はされない心を得るやうになつたのであります。

今だつて、やはり善惡の心が起りますが、初めに、他を善と思うて自を惡と思うてゐた心が顚倒して、他を惡とし、純自己を善とするやうになつたので、以前は逆行的に善惡を見別して、眞實の敎界に達したのが、今は歸行的に常に眞實から眞實へと、精進するやうになつてゐます。

道德の世界がどうの、宗敎の世界がどうのといふやうな、概念の研究のやうな心配をやめて、率直に自分自身の世界に突進するやうにせねばならぬと思ひます。

たゞそれについても、自分自身の道と、自分自身で考へた道とをまちがはぬやうにせねばなりません。自分できめた道は、必ずしも自分の道だとはいはれないのであります。自分できめた道は、概念の道、斷定の道であつて、眞實の自分の道ではないのであります。だからして、善惡の思念によりて眞實に到達する者は、最後の

一擊にはこの思念そのものを超えねばならぬのであります。定めた道に行かうとする時には、それが理想主義の形をとるやうになつてまゐります。その理想主義の生活に就て考へる時に、今の問題卽ち道德の世界と宗敎の世界といふ問題が一層明白になる事と思ひます。で私は筆を改めて、理想主義に就いての考察をかいて、一讀を請ひたいと思ひます。（一一、二、六）

五。理想主義に就て

新理想主義を唱導する者がある、希望に生きねばならぬと叱呼する者があります。私はこの理想主義に就て、希望に生きよといふ事に就て考へてみたいと思ふのであります。

キリスト教徒は信愛望の三つを大切な事としてゐます。この望とは希望であります。希望とは自らの前途に就てある目的を定める事であります。望むといふ事が、自己内心の願求を必然に表現してゆく事であるならば、私はこゝに彼此いふの要はないのである。然し常識的には希望を有するとは、自分の前途に就て、具體的にこうこうこんな風にありたいとか、あらねばならぬとかと、きめてをるのではあるまいか。理想を有するとは、自分の到達點を豫めかやうかやうでありたいとかあらね

ばならぬとか定めておく事ではあるまいか。

自分の未來に就て、具體的にかくあらねばならぬと定める時には、過去の自分の經驗を基礎とし、そこから出發して、推理し、斷定して、かくあらねばならぬと定めやうとするのであります。ある理想を有する人とは、ある斷定をもつてをる人だというてもよいではありますまいか。

私共の生活は未來へ未來へと進展してゆくのである。その未來を既知の世界から推定した斷定を以てきめてをる者がある。こんなのを理想を持つてゐるというてをるやうであります。常に未來にむかつて進展するといふ事には、私は異論はない。而して、未來を、その實は未知の世界であるべき未來を、過去の經驗と推理とを以て、既知の世界のやうにしやうとしてゐるのが理想主義者ではあるまいか。希望を有するといふ事を、そんなぐはひに考へてゐる人も尠くはないと思ひます。

宇宙の萬象が時間的推移をするには、因果の範疇にはいつてくるのである。因と

緣とが集りて果ができる。その果が因となり、それに緣が加はりて果ができる。その果が因となりて、それに緣が加はりて果を生ずるといふ工合に無盡に因果が生ずるのである。それだから、現在は過去の因緣によりて生じたる果であり、未來は現在の因緣によりて生ずる果でなくてはならぬ。果してそうとすると、未來は現在の因と緣とを研究する事によりて斷定する事ができるではないか。それができたらそれを標準として進むのはよいではないかといふ人もある。一寸考へるとそうと思へるが、仔細に考へると之は粗雜な議論である。現在を生ずる過去因緣は、私共の經驗を超えたるものである。因は一つであつても緣は無邊である。だから、その因緣によつて生ずる結果は決して推理して斷定し得らるべきものではないのであります。例へば、ある人がある貧乏人に金百圓施したらその貧乏人が立身出世したといふ事があつた。それを聞いて外の貧乏人に百圓與へたとて、同じやうに出世するとは定められないのである。私共の周圍は自らの主觀の表現なるものであるが、それが識

域に入つた推理や斷定でできるものではないのであります。だから實際に來る者は私共が來らせやうとしたり、來さねばならぬとしてをるものとちがうてくる事があるのであります。

私は常に願求に生きようというてゐます。その願求といふについても根本願求と始末願求とがある。根本願求は識域以上といへばよいか、先天主觀といへばよいか、とにかく、自分で具體的にかうときめることのできずして、只何となしに爲さずにゐられぬ心といはうか、生きずにゐられぬ心といはうか、おさまらぬ心といはうかがもえてゐる。この根本願求が種々の事件や物象に觸れて具體化する時に、認識的にはつきりして來る。之を普通に願望といふのだ。

根本願求が、具體化して自分の自由の爲に健全なる肉體を得たいと願求する。又この根本願求が具體化して天眼を得たいと望むやうになる。或は金がほしいとか、又は美味がほしいとか、異性がほしいとかになる。此根本願求が具體化する事は必

然の事ではあるが、この具體化した願求にくゝられて拘泥してをる時に、根本願求を亂す事があるのである。だから私共は具體化した願求によりて、根本願求をしばらぬやうにせねばならぬのであります。

希望といひ、理想といふのは、多くの場合この具體化したる願求をいうてをるのである。この具體化したる願求は過去の經驗から爲されたる結論のやうなものであります。だからこの願求は眞實の未來ではなくて、過去の再現である場合が多い。例へば極樂の種々の莊嚴のことは、未來の希望を過去の經驗から寫象したものに過ぎないのであります。こんな憧憬の世界を渡つて之を求むるその出發點に溯るこうるはしい眞實心がひそんではゐるが、この極樂莊嚴を唯一の目的とするやうになる時に、未來が過去になつてしまふのであります。蓮如さんが『極樂は樂しいときいてまゐらんとねがひ求むる人は佛にならず彌陀たのむ人こそ佛になるなれ』といはれた意味もこんな所にあるのである。

眞實根本の願求は、具體的の、化城としての願望を描く事は必然であるけれど、この願望に束縛せられ、この願求に使はるゝやうになると根本願求が反つて害せらるやうになるのであります。

希望というても、何と名づける事のできぬ、いはゞ一片鱗の赤心といふやうな、まさに具體化せんとする心をいふのならそれは大切な事はいふまでもないが、その希望が何か具體的なものとなり、それが一の規範となるやうな事がある時には、そんなものゝある事は、眞實の生活を害する事になるのであります。

私共は未來に對して具體的な理想とか、希望とかを抱くのはやむを得ぬ事ではあるが、それを以て生活の標準としたり、規範としたりする時は表裏不相應の虛僞の生活者とならねばならぬのであります。

知られたる未來は眞實の未來ではない、眞實の未來は常に未知でなければならぬ。故に眞實の生活者は一つの理想を追ふ人でもなく、一つの希望を追ふ人でもなく、

定まりたる方式に向ふ人でもなくして、根本願求の動くがまゝに、未知の世界に突進する人であります。

定まりたる理想を追ふ事がわるいといふのではない。定まりたる希望を追ふ事がわるいといふのでもない。然しかくする事が、現實の生活に裏切らるゝといふ事をいうておけばよいのであります。眞實の生活は常に、定めた理想や希望をさん〳〵に破壞して進んでゆくのであります。之を懺悔して理想や希望に順はうとすればするほど、この人の生活に無理ができ、虚僞ができてくるのであります。既に破られたるものを彌縫したり、塗抹したりしてごまかさねばならぬのが理想を追ふ人々の當に陷るべくさだめられた位置なのであります。

輕い意味で生活のある標的を設くる事は、眞實の願求の成長にやく立つのであるが、この標的を重んじすぎる時には反つて眞實願求の成長を妨ぐる事になるのであります。具體化した理想と希望は一種の化城である事を忘れてはならぬ。この城に

止まる時は、眞實報土を遠ざかるやうになるのであります。こしらへた理想に止まらうとする事は、一種の低徊趣味である。だからあこがれのうるはしさは、始めは根本願求の光りがあつてうるはしいのであるが、之に止まらうとする時にこの光が失せてしまつて、詠嘆的な單なる娯樂となり終らうとするのであります。

理想はイデヤある。イデヤは、根本願求そのものに外ならぬのである。具體化せんとする心、動き出さうとする心がイデヤなのである。それを動き出した心、動いて止まつた現象に名けてゐるのが普通のやうになつてゐるのである。動いて止まつた者には形ちがある。この形式をつかまへて理想といひ、之に到達せねばならぬやうに思うてゐる人がある、こんな人をあの人は理想を重んずる人であるというてをる。けれども之はまちがつた見解である。理想はどこまでも内に動き出さうとする心、具體化しやうとする心をいふたのである。之を大切にする人が理想主義者といふのならば私は理想主義者の一人だといふてもよい。然し理想主義が生活に一の標

的を設け、規範をこしらへるものだとすれば、私は無理想主義者といはねばならぬと思ひます。

希望といふ事も、その原始的意義は、内のきらめきであり、心の眼であり、未知の世界に進む心であるのであるが、之も通俗化しては、大臣になるのが私の希望だといふたり、畫工になるのが私の希望だといふたり、勞働運動をするのが私の希望だといふたりするやうになつてゐるのを見ると、希望もやはり心外の標的のやうになつてしまうてをるのであります。

共産主義を理想としてをるといふ者がある。土地國有を理想としてをるというてをる者もある。絶對君主政治が理想だというてをる者がある。こんなのは皆理想を具體化して、それに進まうとしてゐるのであります。

ストリンドベルヒのやうなよい頭腦を持つてをる人でさへ、彼の『青書』の終りをよむと、『望め、けれども祈れ』といつてゐる。之を見ると彼は望む事の外に祈る事

があるやうに思うてゐるやうであります。望みは祈りであり、祈りが望みであるのである。祈りも望みも共に動き出さうとするはりきつた心をいふたものである。根本願求そのものをいふたに過ぎないのである。夫を二つに分けて考へてゐるのは變だと思ふ。

祈りというても、やはり心中の根本願求そのまゝのものであるのを、心外にあるやうに思うてゐる人も尠くはないやうであります。祈りとは神に對しての註文であるやうに誤解してゐる人も澤山あるやうであるが、眞實の意味に於ての祈りは根本願求そのものであつて、それが神自身であるのであります。祈りがそのまゝ神であるのであります。

イデヤには内容がないか。希望には色彩がないか。祈りには到達點がないか。此イデヤの内容、希望の色彩、祈りの標的に、具體的の表現があるのではないかといふ者があります。それは勿論あります。そのイデヤの内容、希望の色彩、祈りの標

的といふものは、鏡にうつる萬象の如く、根本願求の鏡面にうつる所の過去の經驗の相ではあるまいか。そんなものゝうつるのを彼此いふのではない。そのうつるものはイデヤを表現し希望を實現してゆく爲に益だつのではあるけれども、それはイデヤそのものでもなく、希望そのものでもないのであります。プラトーがイデヤを古い世の記憶だとした所に既に理想主義者の陷るべき低徊趣味の萠芽が生れてゐるやうにも思はれます。宿世の記憶をイデヤとし、イデヤの世界が現實以外に存在するやうに思ふのは、イデヤの通俗化したのと同じい誤りに陷つたのではあるまいか。イデヤはどこまでも、潑溂たる根本願求でなくてはならぬ。動かうとする心、未來に進まうとする心がイデヤであるのである。このイデヤは白紙である。タブララーサである。この白紙にいろ〳〵と色どるのはイデヤの具體化であり表現である。この具體化が終り、表現が終りイデヤが一定の形を爲したるときには、イデヤではなくなつてしまふのであります。

私は理想主義を思ひ、希望に生きるといふことをきくと同時に、それが心外に硬化したる一種の概念的規範主義に陷らずして、根本願求そのまゝの踊り出す生活であつてほしいと念ずる心が切なのであります。

具體化した理想を破ぶりて眞實の理想は又新らしき具體化を謀る。之ができるとと又新らしい具體化を謀る。かくて常に未知の世界へ、未知の世界へと進展するのに、心のいさむ生活を大切だと思うてをるのであります。そうして低徊的になり、化城に硬化する事のないやうに常に無倦の前進をせねばならぬと思ひます。(二、二、五)

六。眞理の否定的表現

萬象は流轉します、諸行は無常である。總てが生きてをる。總てが一所に住まはない。だから萬象に定まりたる形ちと相とがなくして、萬相萬態に變化するのであります。萬象に定相がない、順つて萬象に定まりたる名目も到底つけられないのであります。

眞實は常に止まらない、眞實は常に轉々してやまないのであります。だから、之に名づくるに肯定的な名を以てする時には、生きてをる眞理が概念化してしまふ恐れがある。眞實が肯定的形態を表現する一刹那に次の眞實がそれをやぶつて新らしく生れて來る。その生れ來たものが形態を表はすと次の眞實が又それを破つて現はれて來る。かくしてどこまでも、眞實は殼を破り、殼をやぶりて生れて來るのであ

る。

眞實は常に積極的である。積極的であるから、自分の行く所のすべてをうち碎いて悠々と進みゆきます。だから肯定的形相を有するのは勿論である。でもあまり積極的なるが故に、肯定的の言葉を以て之を表現するよりも、反つて否定的な言葉を以て之を表現しやうとするのも、眞實そのものゝ要求であつて、眞實を愛する者の自然に進みゆく方向なのであります。

あゝでもない、こうでもない、前でもない、後でもない、右でもない、左でもない、有でもない、無でもない、一でもない、多でもない、常でもない、斷でもないそういふ風にいふと、多くの人達はまごゝしてしまふのであります。そうすると要するにどうだといふのですと肯定を求めてくる、その人にそんな肯定すべきものがないのですといふと、それでは肯定がないのですかと否定を肯定しやうとするのであります。

眞實は常に『ある』といふ言葉を以て表現し得るのである。けれどもその『ある』といふ言葉には恐ろしい化石の病がついてをるので、眞實は『ある』といふよりも『ない』といふ言葉の表現を求めやうとするのであります。

眞實は積極的であるからして一層切實に『ない』といふ言葉によりて表現せらるゝのを求めてをるのであります。私達が眞實に尤も忠實であらうとする時には『非』とか『無』とか『不』とかいふ言葉が多く用ゐたくなるのであります。『非』『無』『不』は流轉を詮はしてゐるのであります。生命を表現してゐるのであります。眞實の尤も強い力、積極的な力は、この『非』『無』『不』等の否定的な言葉によるにあらではよく生き〳〵といひ表はす事ができないのであります。

偉大なる生命の創作『華嚴經』を傳來して來た龍樹菩薩は、その著『中論』に於て盛に『不』『非』『無』の否定的文字を使用して眞實を表現しやうとしてゐるのであります。

『華嚴經』は、心王菩薩問阿僧祇品に盧遮那佛が宣言してゐらるゝ通り不可思議轉の轉の妙法を說いた經であつて、不可思議といひ、不可說といひ、不可稱量とたゝへてゐるのであります。『華嚴經』は海を以て、雲を以て、萬象の生々して流轉やまない眞實相を語らうとしてゐるのであります。そうしてこの經典には至る所『不』『無』『非』の言葉で以て、眞實を眞實のまゝに表現しやうと努力してゐらるゝを見て私はこよないよろこびを感じてゐるのであります。

生にあらず、滅にあらず、去にあらず、來にあらず、一にあらず、異にあらず、斷にあらず、常にあらずといふ八不の上に中道を語らうとした龍樹の努力と眞實に忠實な姿が見ゆるではありませんか。

禪の書物を見ると『無』の一字といふことのやかましくいはれてあるのにも、眞實に忠なる心がほの見えるのでうれしいのであります。

有にあらず、無にあらず、有にあらざるにあらず、無にあらざるにあらず、これ

こと定むることのできないのが如實の法ではあるまいか。『華嚴經』が生命そのもの、燃燒を高唱した經典だけに、この否定的言葉を使うてあるのであらうこと私は思ひます。

生々として止まる所のない如實の法にはどうしても定まつた名目をつける事ができぬ。かくする事によつて眞實の硬化するを恐る、所から、眞實に忠實なる人達は常に否定的の表現を試みて來たのではあるまいかと私は思ひます。

一蓮院が嘗て、引きやぶり〳〵その引きやぶりたりと思ふ心も引きやぶりと申された事も思ひ出されます。引きやぶり〳〵引きやぶりといふのは、生から生への流轉そのまゝの姿ではあるまいか。自然法爾の大道は常にかく引きやぶり引きやぶりてそうして進轉するのではないか。

何か固定した概念を、眞理だと思うて摑みたい人達には、否定的な言葉はいかにものたりなからうと思ひます。それだけに眞實を愛する者には、肯定的な言葉が

遣ひたくないのであります。

昨の眞實相はけふの眞實相ではなく、けふの眞實相は昨日の眞實相ではない。だからその一つ一つに肯定的な命名をしてゐると、眞實の生き〳〵した相がかくれやうとする。之に反して、否定から否定へと表現する時に、その眞實が前の眞實をやぶりて生れ出る。その生れ出るものをやぶりて生れ出る、息む事のない生命の道がよく現はるゝのである。一寸考ふると肯定的な言葉は否定的言葉より積極的なやうであるけれどよく〳〵考へてみると否定的言葉の方が肯定的な言葉より以上に積極的な生々したる相を表現してゐるのであります。生々して流轉やむなき眞實を表現するにはどうしても否定的な言葉でなくてはならぬやうに思ひます。

尤も眞實は決定から決定へと流轉してゆくから、常に『ある』から『ある』へ移るのである。夫を『ある』所の相で表現すると靜止的になるが、『無』とか『不』とか『非』とかといふ否定的な言葉を以て表現すると いかにも生々して動いてゐる相が現はる、

のであります。

人達が捕捉する事ができぬといふ否定の言葉の上に、私は常に、捕捉すべからざる不可説轉の轉である所の眞實道が表現せられてある事を體驗的に味ふてをるのであります。（一一、二、五）

第三章　愛の諸問題

一。男の生首に接吻する女

此頃友人からビヤズレイの畫集を送つて來た。その内に、一人の若い女がだらだらと血のたる生首を皿の上に載せて、その髪をつかんでぢつと顔をみつめてゐる繪と血のたれてゐる首を兩手でもつてキスをしてゐる繪との二葉があります。二葉共にサロメをかいたものであつて、第一は『危き酬い』といひ第二は『クライマックス』と名づけてある。この二葉をみてゐるうちにふとワイルドの『サロメ』の事を思ひ出して種々の感想を得たので、改めて、『サロメ』を中村吉藏氏の譯本で讀んでみた。

サロメ姫は猶太王ヘロド王の妃ヘロヂヤスの連れ子である。ヘロド王はサロメに戀をしてゐる。サロメはヘロド王が畏敬してゐた豫言者ヨカナアンを一目みるなり戀に陷ちた。その肌、その髪、その唇に心を動かした。ヨカナアンはサロメの誘ひ

に眼をくれなかつた。サロメはヘロド王が舞ひを求め、舞ふたならば好む者は何でもやると誓ふたので、舞ふて後に、ヨカナアンの首を求めた。王は寶石を以て、白い孔雀を以て、美服を以て、之に代へやうとしたけれども、サロメは銀の皿の上にヨカナアンの首が載せて欲しいと求めてやまなかつた。

× × ×

サロメ……此の世には汝の口ほど紅いものはない。汝の口に接吻させておくれ?。

ヨカナアン。ならんバ。ビロンの娘、サドムの娘、決してならん。

サロメ　私は汝の口に接吻する。ヨカナアンよ汝の口に接吻せずにはおかぬぞよ。

ヨカナアン　……

サロメ　汝の口に接吻せずにはおかぬ。

ヨカナアン　……

サロメ　汝の口に接吻せずにはおかぬ、ヨカナアンよ。

ヨカナアン　汝は恐ろしいとは思はぬか、ヘロヂアスの娘よ。私は死の天使の羽ばたきの音が宮殿の中で聞えてゐると汝にいつた。果して死の天使は來たではないか。

サロメ　汝の口に接吻させておくれ?。

ヨカナアン　姦姪の產んだ娘よ、汝を救ふ者は唯一人しかない。先程もいつたその人だ。行つて主を尋ねい!。主は今ガリラヤの湖の舟の中で、弟子等に教を說いて居たまふ。汝は海邊に跪いて主の名を呼べ。誰でもその名を呼ぶ者のところへ主は來りたまふ。その時汝は足下にひれふして罪の救ひを求めい!。

サロメ　汝の口に接吻させておくれ!。

ヨカナアン　汝は呪はれたる者だ!、姪亂の母の娘。呪はれたる者だ!。

サロメ　汝の口に接吻したい。ヨカナアンよ。

ヨカナアン　私は汝を見たくない。汝は呪はれてゐる。サロメ、汝は呪はれてゐる。

（彼は井戸の中に下りて行く）

サロメ　私は汝の口に接吻してやる。ヨカナアン。汝の口に接吻せずにはおかぬ。

×　×　×

サロメは七遍までくりかへして汝の口に接吻せずにはおかぬと迫つた。思ふた念力岩をも通すのおもむきがある。これほど深く思ひこんだものには、失戀なごしをゐゆとりをもたぬ。かくて接吻を求めたサロメは、つひに、戀人の首を求むるに至つた。『ヨカナアンの首が所望でござります』と五度まで王に求めた。始めに自分に戀してゐる若い男が自殺するのにも目もくれずしてヨカナアンに接吻を求めたサロメは、今度は王のあらゆる提供を退けて無二無三にヨカナアンの首を所望した。かくて思ひは通つた。首きり人が銀の皿にヨカナアンの首をのせてさしあげた。

サロメは之を受取つて、いふた。

――汝は唇に接吻させてくれなかつた、それでも私の思ひ通りにならないわけにはゆかなかつたのだ。ヨカナアン、私は今汝に接吻してやる。熟した果物を嚙むやうに、私のこの齒で嚙んでやる。私は汝の唇を接吻してやる。……汝は私を嫌つてゐた。ヨカアナン、汝は私を刎ねつけた。私に憎らしい言葉を吐きかけた。妃ヘロヂアスの娘ユダヤの國の女王サロメを汝は賣女のやうに猥な女のやうにあしらうた。それでも私はまだかうして生きてゐるのに、汝はもう死んでしまつた。そうして汝の首は私のものになつた。私はそれを自分の思ふ通りにできる。……あゝヨカナアン、ヨカナアン、汝は男子といふ男子の中で私の愛したたつた一人の男子だつた。外の男子はみな私は嫌ひだが、汝だけは私は美しいと思ふた。……アヽ、何故汝は私を見てくれなかつたか、ヨカナアンよくもあんなに私の手を袖にしたり、惡口を袖にしたりして姿を隱してしまつたのね。汝は

自分の神が見られただらうのに、自分の眼に蓋をしたのだ。ヨカナアン、成程汝は神を見た人かも知れないが、私を、私こいふものを見てくれなかつた。若し私を見たら、汝は私を愛してくれただらう。私は汝を見てやつた。そうして汝を愛したのだ。オヽごんなに汝を愛したか知れない！、私はまだ汝を愛してゐる。ヨカナアン！汝ばかり愛してゐる。渇いてゐる者が水を欲しがる程、汝の美はしさが慕はしい。饑えてゐるものが食物を欲しがる程、汝の體が欲しい。酒も林檎もこんな時の用にはたゝぬ。汝は今ごうしやうか。ヨカナアン！洪水も大水も私の胸の火を消すことができぬ。私は王の娘だ。それを汝は卑んだ。私は清淨な處女だつた。汝はその處女の性を奪つてしまふた。私は清らかなものだつた。それに汝は私の血管の内に消されぬ火を付けたのだ。アーアー、何故汝は私を見てくれなかつたのだ。つい見てさへくれたら私を愛してくれただらうに、私を愛したに違ひないに。戀の秘密は死の秘密よりも大きいものではないか。

……

……

奴隷松火を消す、星隱る、大なる雲、月を横切り全くそれを隱す舞臺暗くなる。

……

サロメの聲、アヽ、私は汝の口を接吻しました。ヨカナアン！私は汝の口を接吻しました。汝の唇には苦味がある。あれは血の味か。イヤ、あれは戀の味だ。戀は苦味をもつてゐるこいふことだ。併し何でもよい！私は汝の口を接吻しました。ヨカナアン、私は汝の口を接吻しました……。

× × ×

サロメが汝の口に接吻さしておくれこ繰り返して求めた折には、彼女の心の全てが愛に燃えてゐた。純一の魂に生きてゐた。處が、ヨカナアンはこてもこの戀を受け容れてくれさうでないので、こうこう接吻してみせるこまで決意した。接吻さし

てくれと求めた者が、接吻して見せるといふやうになつた所に、次の、ヨカナアンの首が所望でありますと、頑固に一點張りにせがむ心が萠してゐる。首が欲しいといふ時には、彼女の心はもはや愛を去つて、私は王の娘ぢやといふほこりを持つた、勝氣に支配せられてゐる。故に首がほしいと求むるやうになり、首を得て、之に接吻し、之で私の思ひが通つたというて自ら慰めるやうになつた時には、愛の滿足ではなくて勝利の快感を得たのであります。サロメは言葉通りにヨカナアンの唇にではなく死んだ首にであつ吻することができた。然し夫は生きたヨカナアンの唇にではなく死んだ首にであつた。愛ある者を所有する爲めに、無理に、愛する者を殺してしまひ、その屍を抱き屍に接吻して、漸く慰まんとしてゐる者が尠くない。サロメのやうな女もあれば、サロメのやうな男もある。之等は皆自分の道を忘れて横道にそれた人達であります。

生きてゐるヨカナアンのあたゝかい血の通ふた紅い唇にこそ接吻がしたかつたにちがひないが、血のしたゝる銀の皿にのせた首の唇に接吻して何のよろこびがあら

う、若しありとすれば、それは愛の喜びではなくて、我意の通つた喜びであります。

サロメが始めに、私に接吻させて下さいとせがむ心には尊い生命の力がこもつてゐるが、後に首が所望でありますと頑ばるやうになつた時には、最早我慢を張通すといふに止つて、うるはしい愛の本能の發露を見ることができないのであります。昔何とかいふ武士が、自分の愛する女が、自分の愛を受け容れてくれないのを怒り彼の女をなぶり殺しにして心のなやみを晴らしたといふことだが、之れはサロメと同じ心の姿を見せるものであります。

サロメを思ふ時に、私は清姫を思ひ出さずに居られません。清姫はサロメが豫言者ヨカナアンを戀したやうに、聖僧安珍を戀した。安珍はヨカナアンのサロメに眼もくれなかつたやうに清姫を捨てゝ逃げた。清姫は後を追ふた。安珍は川を渡りて道成寺に逃げこんだ姫は蛇となつて川を渡り寺にいつた。安珍は鐘の下にかくれた。姫は火焔をはいてこの鐘のぐるりをまはりまはりて、安珍はたうとう灰になつてし

まふた。

男を思ふ女の執心といふ點に於てはサロメと清姫と同じやうではあるが、サロメがヨカナアンの首に接吻する氣持と、清姫が安珍を灰にする氣持とは、大いに違うてゐると思ふ。サロメの場合では、接吻をさせて下さいといふた愛の心が、我慢によりて首がほしいとまでに變化し、つひに首を得て之に接吻して、我が意達せりとしたのに反して清姫は蛇になりて川を渡る時にも、鐘のめぐりを火焔をはきてぐるぐるまはる刹那にも、安珍を憎む心もなく、勝たうといふ心もなく、安珍を灰にして滿足しやうといふ心もなく、たゞ純一に愛に燃えて、戀に焦がれてゐたのであります。その結果から云へば、ヨカナアンも死んだのだし、安珍も死んだ。だが、サロメと清姫とは全く大變な違ひ目があつたのであります。

信長といふ人は、『鳴かぬなら殺してしまへほとゝぎす』といふ風な人格であつて、秀吉は、『鳴かぬなら鳴かしてみせうほとゝぎす』といふやうな人格者であつたと論

じた人があつた。サロメは鳴かぬなら殺してしまへの方で、清姫は鳴かぬなら鳴かしてみせうの方であります。

愛する心には所有しやうといふ心持ちのついてゐることはほんたうであるし、所有觀念のない愛の心のあるといふことはないのだけれど、でも所有觀念が主となつて我がつのるやうになつては愛は横道にそれたものと見てよいと思ふ。愛はどこまでも、生きた人格が生きた人格に接觸しやうする心である。ヨカナアンの紅い口に接吻したいのは、生きた人格を所有しやうとする心である。紅い口はそのヨカナアンの溫き心の表象であるから願はしいのである。然るにヨカナアンを殺してしまふた首、その首の口にはもはやヨカナアンの溫き心は宿つてをらぬ。こんな首を所有したとて、こんな口に接吻したとて決して愛の心が滿足はできないのである。きつと接吻して見せるといふ心や、自分に戀してゐる嫌ひな男のヘロド王へのつらあてにこそなるが、自分

の心の奥底に秘める愛の心の滿足は決して得られないのであります。サロメがヨカナアンの首に接吻したのは、半ばヘロド王に對する面當てではなかつたらうか。これだけ彼女の行爲に不純な分子が加はつてゐるのであります。意氣地こか張りこかいふ事はあつたらうが、サロメには夫れだけ純一な戀の心が弱められてゐたやうであります。愛が憎こ變ずる心なごも、戀の横道であつて決して純一な正道の進みではないのであります。

サロメがヨカナアンの首に接吻して滿足する心は、自分の愛を退けた女を强姦して快を得る男の心こ同じではあるまいか。愛する女を强姦する男の心、その男の心にも最初には尊い愛の心が萠してゐるのではあるが、その愛の滿足を得るここに卒急にして、女の愛を得るここにつこめないで、愛のない女の肉を抱いて愛の慾を滿足せしめやうこするのである。始めから單なる肉慾の衝動のみによりて女を强姦するならばこもかくこして、苟くもその女に愛があつてのここならば强姦は愛を裏切

るものこいはねばならぬ。サロメが單にヨカナアンの紅い口に接吻するここのみを求めてゐて、ヨカナアンの愛の心を求めてゐなかつたのならば、銀の皿の上の首に接吻して滿足はできただらうが、ヨカナアンの溫き愛の血の通ふた唇に接吻したかつたのなら、こうしてもこの心は銀の皿の中の首に接吻したこて滿足せしめらるゝものではないのであります。サロメがヨカナアンの首を所望してゐる刹那に自分の愛を裏切つてゐたのではなからうか。

サロメが自分の愛のない男が自分を愛して自殺するのも顧みないで、自分の愛する男に接吻を求めた態度は尊く思はるゝけれこ、自分の愛する男が自分の愛を容れてくれず、求むる接吻を許してくれないので、それを强ひて得やうこする心こ、愛せざる男に自分の愛をみせびらかす心こ、何でもまけてはをられぬ心こで、銀の皿の上に愛するヨカナアンの首をのせて接吻するサロメの不純な心持ちには同情するここができない。

私は自分の愛する男の首を銀の皿にのせて接吻してゐる女、接吻しやうとしてゐる女の澤山を知つてゐます。又自分の愛する女の首を銀の皿にのせて接吻してゐる男、接吻しやうとしてゐる男を多く知つてゐます。そうして私はその愛のそれた、不純な所有觀念から生れた行爲を嫌はずにはゐられない。私はどこまでも、彼の清姫のやうに純一に自分の愛の火焔に燃えてゆく、愛の正道を尊く思ふのであります。

こんなことは男女兩性の間の愛のみに止まらず、親子の間の愛情に於ても之と同樣な事があるのであります。愛する子の首を銀の皿の上にのせて接吻してゐる親はゐないか。愛する親の首を銀の皿の上にのせて接吻しやうとしてゐる子はゐないか。

掌中の珠のやうにして愛するといふが、生きた人間を珠のやうに掌中に丸められ得やうか、愛は互の心を融かして一にする點から、互の間に、珠となつて、掌中に丸められつゝそこに自由な生命の力が踊つてゐることのあるのは勿論ではあるが、そうぢやなくして、一人が他人を自分の掌中の珠のやうに、愛する者の自由なる生

命を重んぜずして、徒らに、自分の内心にこしらへた概念通りの者としてそれを勝手に處理すること、丁度銀の皿の中にのせた首を勝手に接吻することのできるやうに、自分の優勝を誇らんとするに至りては言語道斷といはねばならぬ。

繁茂する草木に害蟲の多いやうに、愛の力の強い所にも、恐ろしい征服感の動いて、愛する者の生命を奪はうとする心の動くのを恐れねばならぬ。

勿論、私は愛する互の間には、我の生命と彼の生命と隔たりのなくなつてゐる場合のあることは知つてゐる。かゝる場合には、銀の皿の中に首をのせるといふやうなこゝろが起らう筈がないのであります。（一〇、六、一六『中外日報』）

二。徹底なき愛の傷み

ある女がある男への文に淋しい淋しいとかいてやつた。

男は女が自分を戀うてゐるのだと思ひこんだ。

そうして女の淋しい心を慰むるには、熱愛を彼女に注ぐより外はないと思ふやうになつた。

彼女の淋しさを慰め救ふ積りであつた彼は、つひには彼女によりて慰められ、救はれねばならぬやうな戀のとりこになつてしまふた。

千代尼が夫に別れたをりに、

起きてみつねてみつ蚊帳のひろさかな

といふ句を吟じたといふことをきいて誰かゞおごけまじりに

お千代さん蚊帳が廣けりやはいろうか

と吟じたときいてゐます。淋しさを訴へると、この淋しさを慰めやうとして、愛情を催す者ができるのである。

男が女に對して淋しいとかく時には、女の愛を求めてゐるのである。女が男に對して淋しいとかく時には、男の愛を求めてゐるのである。之は自覺しないで、そうやつてをるのである。私は淋しいと告白すれば、お力になつてあげませうかとつい出されるのであります。たとひそれが無自覺的にもせよ、淋しさを訴ふるのは愛を要求してをるのであります。

ある男が淋しい淋しいと女に文をかいて女に熱愛せられて、自分にはこれほどの熱愛がなくて困つてゐるのを知つてをります。

ある女が男に對しての文に淋しい淋しいとかいて、男から戀せられて困つてゐるのを知つてゐます。

この淋しい女に戀する男も、淋しい男に戀する女も、同じ心理であります。ちつとも無理のないことなのであります。

今の世の男も女も、あんまり、この淋しい淋しいといふ訴へを安價に訴へすぎるではあるまいか。淋しい心を訴へる時には、この人に慰められてよい程の用意があつてほしい。とはいふものゝほんたうにやるせなく、淋しい時には、そんなことを考へてゐるゆとりなんぢないものだから、誰彼の隔てなく淋しい淋しいと訴へて、をり〳〵意にもない戀をしむけらるゝことのあるといふことを知つておいてよいと思ふ。

ある女が一人の男に捨てられかけてから、淋しい淋しいと、どんな人にでも訴へてあるいた。多くの男が同情するやうになればなる程、一人の男の心が、彼女と隔たつてゆくやうになつた。その女が私に淋しい淋しいと訴へたから、あなたはどうしてあの男にこの淋しい心を訴へぬのですかといひました。多くに訴へるものは一

人を得ることができないものです。

やるせないからとうろ〳〵してまはつては、いつまでもやるせないばかりである。やるせない心をぢつとだきしめて、こゝに新らしい力の醗酵をまつやうにしなくてはなりません。

淋しい心を、ぢつとだきしめて眞劍に自分の内から湧いてくる愛の光にふれなければ、一生浮ぶ瀬がないと思はねばならぬ。

愛する者もなく、愛してくれる者もないことは淋しさの絶頂である。愛する者がありつゝ、或は愛せらるゝ者がありつゝ、その人と共に住むことのできぬのも淋しいものである。それぢやというて、愛する者があつても、愛せらるゝ者があつても淋しい事がある。愛する者や愛せらるゝ者と別れてゐて淋しいばかりではなく、一所にゐてさへ淋しい淋しい心に打たるゝことがあります。こゝに來ると人の心の淋しさは、どんな人によりても永久に滿たさるゝものではないやうに思はるゝ。(一時

的には勿論みたさるゝことはあります。愛人のなかつた人が愛人を得たる時。愛人と別れてゐるものが逢ふた時の如きは暫らくは何物も要せぬ程に滿たされた思ひになつてゐるのだけれど。)

戀心の淺い、愛の熱の低い間柄の女は、あなたのお側にさへゐれば滿たさるゝともいひます。あなたのお顏さへみればにぎやかになりますといひます。しかしだんだん戀心が深まりゆき、愛の熱が互に高まつてゆくやうになるとをり〳〵共にゐながら、顏をみあひながら淋しい淋しい心に打たれて泣く事があるやうになります。相見て滿足し、相見てすべてを忘るゝ人が、相見ても滿足せず、相見ても涙せにやをれぬやうになつた時に、戀は一層深くなり、愛は一層深く熱してゐる事を思はねばならぬ。これはどうしたわけなんだらうか。この淋しさ、このやるせなさは疑惑からくる所の不安があつてゞはない、粗雜な意味での滿たされぬ思ひがあるといふのではないけれど、やはり不安と不滿とが、湧いてゐるのであります。戀が深まれ

ば深まるほど、愛が熱すれば熱するほど、不安と不滿とが起つてまゐります。この不安と不滿とによりて、戀愛はます〳〵深められ熱せられてゆくのであります。然しをり〳〵この不安と不滿とによりて戀の破綻となり愛の冷却となることがあります。こゝにも、强い内省による、不退轉の精進が大切であります。

全く一人を愛しきつたらよい、全く一人に愛せられぬいたらよいとは思ふが、それがなか〳〵むつかしいものである。全く一人を愛しきる事も容易な事ではなく、全く一人に愛せられぬく事も決して容易な事ではありません。ある一刹那には全分を與へたと思ふ折もあり、全分を得たと思ふをりもあるのではあるが、すぐそのあとから愛しきれない、愛せられぬかれないものがでゝくるのであります。

それだから、どんなに愛し愛せられてゐる仲でも、少しも油斷のできぬものである。どんなに水も漏れぬまでに溶け合ふた間でも、所有し得たりと安心したら、そこから不安と不滿の雲がむら〳〵と起つてまゐります。だから戀愛には、これで

よいといふ安心はいつまでいつてもできないのであります。故に不斷に戀することは不斷になやむことであり、不斷に心を働かすことであります。

人を愛することは植物や動物を愛するやうに瞬間も油斷せずに、顧慮し、愛護せねばならぬのであります。しかしそこにはまた、戀の破綻と愛の冷却を萠すことがあります。丁度せゝりすぎて草木を枯らすやうに、肥料を過して草木を枯らすやうな事もあるのであります。

愛する一人さへをればよい愛せらるゝ一人さへあればよいと思ひもするしいひもするが、之もある瞬間だけであり、一人を愛する時に他の一人又は數人にも眼は注がれるのであり、一人に愛せられて足れりとする間に、其他の一人又は多數に愛せられたい念の萠してゐるのも、かくすることのできぬ事實である。こんな心を浮氣といふのだらうか。人には皆こんな浮氣心があるのだらうか。でも之が浮氣心なんだらうか。

一人で滿たない愛は、二人でも滿たない、三人でも、萬人でも滿たないかもしれん。だからというて滿たない心のまゝぢつとしてゐることもできない。こゝに、愛の進展もあり、退却もあるのであります。

ごうしたら愛する者の心を滿たし得やうかと苦しんでも、とても滿たし得ないことに傷み、滿たさずにはぢつとしてゐられぬ心になやみつゝ精進するのであります。愛してくれる人の愛がごうしても自分の全分を滿たしてくれないのに惱み傷む事もあるのであります。

愛は徹底を求めてやまぬものであるが、愛の徹底は不可能なものではあるまいか。徹底し終つた時に愛は死んだ殼に入つてしまふのであつて、生きた愛は常に徹底を求めつゝ、不滿と不安と焦慮とに傷みつゝ、悶へつゝ精進するものであります。だからして哀愁のない愛もなければ、苦惱のない戀もないのであります。

戀愛はなまけものにはできないものであります。この道は、懈怠なる者と、憍慢

なる者と、卑怯なる者にはなか〳〵開かれぬのであります。安逸を貪る者には、と
ても戀愛はできないのであります。利己主義者や享樂主義者は、到底戀愛の道には
進まれぬのであります。戀には甘い味ひもあるが、それが深くなればなるほど、熱
すれば熱する程、苦い、傷ましい味ひが出てきます。そこで大抵の者は享樂的に、
利己的に、戀愛をすてゝ、常識の道に退却するのであります。

私達には金を得ても、名を得ても、學を得ても滿たされない心があります。この
心が淋しさを感ずる心です。この心が戀愛を孕みます。男は女を得、女は男を得て、
一時は淋しい心が滿たさるゝやうではあるが、その戀愛の底から一層淋しい心が湧
いて出るのであります。人は一生淋しさから淋しさへと、旅せねばならぬのだらう
か。

いつまでも淋しい心、この心はどこまでも人を戀はしめる、戀うても戀うても戀
ひたらぬ、愛しても愛しても愛したらぬ、愛せられても愛せられても愛せられたら

ぬ、淋しい心が、常に私を若やかせ、私を活躍させるのであります。

いつまでも淋しい心、いつまでも滿たない心、どこまでも愛に渴き、いつまでも
愛に饑えてゐる。私の心よ、徹底を求めて徹底するこのできぬ愛の心よ。

いつまでも淋しい淋しいと人を戀うてゆくのであらうか。

愛する者をもちながら、愛してくれる者をもちながら、豐滿な人の心に充分にふ
れてゐながら、尙私は愛に渴いてゐるのであります。やはり淋しいのであります。

どこまでいつても私の心には滿たないものがあります。切ないものがあります。

やはり私はどこまでも涙の子なのであります。（一〇、八、二七）

三。愛は所有する

鮎は瀬にすむ
鳥や木にとまる
人はなさけの下にすむ。

といふ詩は古うから私達の同朋によりて親しく謠はれてきたものである。私は此頃つくづくとこの詩の意を味はしめられてをるのである。人が愛の下に育つばかりでなく、總ての生物はみな愛の下にのみ生き育ち成長するものであることは決して耳新らしいことではないけれど、私が一つの文章を草してみねばならぬ程に私に強い印象を與へてをるのであります。

愛は與へることであるといふ人もあり、愛は惜げなく奪ふことであるといふ人も

あります。與ふることも、奪ふことも愛の作用であつて、此の二面は常に併存してゐるのであります。惜げなく與へもするし、奪ひもする、いはゞ、與へるか、奪ふかいふ隔たつた感じのなくなつた一如の世界にのみ愛があるのであります。愛には自他の區別がなくなります。故に與へるでもなければ、奪ふでもない、たゞその形式に於て與へるやうにも現はれ、奪ふやうにも現はるゝのであります。

愛することは引くことである。愛する力は引く力である。愛するものは、愛せらるゝものを、自分のふところに引きよせずにはおかぬ力を持つてをります。人を愛すれば、この人は愛する者に引かれずにはをられないやうになるのであります。

私は近い頃になつて鐵齋の繪の妙味に觸れることができるやうになりました。彼の眞筆はまだ多くは見ないのだが、本年の春大阪の高島屋で編輯した『掃心圖畫』といふ彼が畫譜を見て、私はぞくこん鐵齋に惚れこんでしまふたのであります。鐵齋の繪は日本に於ける南畫の尤もすぐれたるものであるのみでなく、日本に於ける尤

もすぐれたるものであると思ひ、尙進んでは、セザンヌやゴッホの繪も鐵齋には及ぶまいとまでに思ひこむやうになつたのであります。かくて私は鐵齋の繪を愛するの熱情は隨分高度に達したのであります。愛すると所有したい念の起るのもさけ難い事であるので、鐵齋の繪がせめて一葉でもほしいと思ふたが、彼の繪は隨分稀であつて、隨分高價なものなのでとても私のやうな貧生には求めらるべくもないと斷念してゐました。せめては見るだけは、あさつて見やうと思ひたつたのであります。

先日友人の所に行つて、嘗て見せて貰ふた鐵齋の繪を改めて見せて貰ひ、頻りに鐵齋の繪を賞讃した所、突然その友人が、あなたはそんなに鐵齋を尊んでゐらるゝなら、私はもう一葉もつてゐます。小さいものですが、あれでよくば差上げますといふので、私は夢のやうな心地になつて、うれしくてたまらず、見せて貰ふた所、若い時分のものだけれど、なか〳〵面白いものであるので、私はよろこんで貰ふことにしました。その折に、私は鐵齋の繪が私に所有せらるゝのを欲してゐたかのや

うに感ぜられたのであります。私は愛することは奪ふことであるといふのではなくて愛することは得ることであるといふことをほんたうに切實に感じました。

私が蘭を愛するので、種々珍らしい蘭が私の下に集つてまゐります。私が愛する念にもえてゐて、また所有しやうと思はぬ前に、私の所有になるやうな場合が澤山にあるのであります。

金を愛する者のふところに金が走りよりくるのも明白な事實であります。そこへゆくと金でも植物でも繪畫でも生きたものと同じ心をもつてゐるやうに感ぜられます。私が蘭を愛すると天下の蘭がそれを知つて、私の側に來やう來やうとしてゐるやうに思はれます。私が鐵齋の繪を愛すれば、鐵齋の繪が自然に私の有に歸するやうになつてまゐります。

子供は愛する人の後を追ひます。私は青年時代でも少年時代でも、いつも私を愛する人の側によりそうてまゐりました。今でもやはりそんな傾向があつて、常に愛

に引かれてあちこちしてゐるやうな氣がいたします。

私を愛する事の強い力は、いつのまにやら、私を引きつけてゆくやうであります。同時に私も又愛する者を自分の側に引きつけてくるやうであります。

愛する者は所有するやうになりますが、所有しやうと思うてをる者はなか〳〵所有し得ないのであります。金のやうなものでも、金を愛する者は金の所有者である事ができるが、金の所有を欲する者にして、金を愛しない者が金の所有者になつたためしはない。特に人になると、彼を自分の所有にしやうと思ふたとて容易になるものではなけれど、その人を愛すれば、自然にその人が自分のものとなつてしまふのであります。だからというて、この人を愛すればつひにはこの人を所有することができるから、愛しやうとして愛するなどは、それはこしらへた愛だから、目的のある愛だから、何等の力もないのであります。

結婚することは所有しやうとすることである。それだから近代の男女には突然結

婚を申込んでは、一寸應ずる者はないが、心からの戀愛にはつひに互にうちまかさずにはゐられなくなつて、こゝに所有觀念をさづく、所有に入つてしまふのであります。

愛の最初の一念はどんなだらうと考へてみると、つひに不可思議の因緣といふやうなことに逢着せずにはゐられなくなります。主客未分の愛の初一念は、とても言語に註すことのできぬ程の神秘なものである。それが形に現はるゝ最初は尊敬又は敬慕の情ではなからうか。自分の滿たない者を、對手によりて滿たされたい願ひ、滿たさるゝ喜びが愛の最初の姿らしいのであります。

そうです、何となく、唯何となく、かわゆくなつた、戀慕するやうになつたといふものゝ、私の戀愛には常に敬慕の心が最初であるやうに思ふ。この敬慕の心が自らを彼女の前に跪づかせます。彼女の前に私が跪づく時に、彼女は全身を私に捧げてまゐります。私が彼女をかやうに敬慕するやうになるには、彼女も亦私を敬慕し

つゝよりそつて來たにちがひない。私は思ふ。世に片戀といふ事はあるが、目の覺めた者には片戀などはできないものであると思ふ。戀する心は、片方から成長する者ではなくて、雙方の心が通うて進轉してくるものなのであります。互に敬恭するやうになつて、互に身を捧ぐるやうになつてくるのであります。『女は己を愛する者の爲にくしけづり、男は己を知る者の爲に死す』といふ諺があるが、男だつて、女だつて、己を愛する者には自然に引かるゝのである。引かれ、引かれて、つひにはそれに引きつけられて、所有せらるゝに至るのであります。

愛する心には、その愛の對象に對して偉大さを感ずると同時に、プレッティなかわいさをも感ずる小さゝを感ずる、幼なさを感ずる所に愛の火がもえる。此小さゝを感じ、幼さを感ずる所に、抱擁せずにはをられない情緒が萠してをるのであります。愛にこの情があるので、愛せらるゝ者に自然にこの情緒が滿足せしめらるゝのであります。かくして、愛は自然に所有するに至るのであります。奪ふといふよりも、寧ろ自然に所有するのであります。愛は所有衝動によるものではないが、愛の創造衝動は自然に所有するに至ります。奪ふのではなくして、愛してゐる者のふところに愛せらるゝ者が自然にとけこんでくるのであります。

只愛せよ、目的なしに愛せよ、愛する者は弱い、そうして尤も強い。愛する者は勝たうとしない、そうして常に勝つてゐるのであります。愛には勝敗もなく、利害もなく、與へるもなく、奪ふもないのであります。

愛人を所有しようとする者は所有し得ないかもしれんが、ひたすらに愛すれば、自然に愛せらるゝ者は、愛する者のふところから逃げ去るやうな事はない。愛人に逃げらるゝのは、その人の愛の力が弱いからである。愛の力の強い者は常に愛人を所有してゐるのであります。（一〇、八、二八）

四。愛は苦也力也

人の心の中で、尤も苦しい痛みは愛であらう。人の心の中で、尤も甘いものが愛であるだけに、尤も苦しい痛ましいものも愛であるのであります。

貧苦がつらいといふ、しかしそこに親子、兄弟、夫婦の愛の伴はない以上は、その苦しみは至極單純なものである。これに愛の味が加はる時に、その貧苦が深くなつて深刻な痛苦となるのであります。

別れの苦しみ、死の苦しみというてもです。愛のないものこの別れに何の苦しみがあらう、愛のない所の死に何が苦しみがあらう。愛があればこそ別れの苦しみも苦しいのであり、愛があればこそ死の苦しみも苦しいのであります。

私達は對人關係の上に、苦痛を感ずる事がある。そのいづれの場合にしても愛の

ない所の苦痛も問題も簡單であり、淺薄である。そこに愛の關係がある時に苦痛も問題も深刻になつてゆくのであります。

どんな問題でも、愛に關係しない問題は、簡單に解決もつくものであるが、愛の問題はなか〳〵容易に解決がつかないのであります。事件の解決は容易につくが、愛の解決は容易につくものではない。私達が、行くも死せん、止まるも死せん、退くも死せん、一つとして死をまぬがれぬ苦痛を味ふのは愛の苦痛にはいつた時にのみ味はるゝ事であります。愛の問題は複雜であり、執拗であります。だから金の問題や權力の問題のやうにはつきりときまりがつかないのである。古人が綿々として盡きずといふたやうに、愛の葛藤はほんたうに紛々として盡きぬのであります。だから、大ざつぱに、右とか、左とかきめることができないのであります。

だから、愛の深い人程苦痛が多いのであります。愛執の心から解脱し去る事ができるなら、深刻な苦痛はないのであります。

泥田をふむやうに、右足をあげれば左足がしづみ、左足をあげれば右足が沈み、ごうする事もできぬやうなはめにはいるのは、愛執の深い者のをり〳〵はまりこむ道なのであります。愛の心の薄いものにはこの泥田をふむやうな、きまりのつかぬやうな苦痛はないのであります。

佛は大慈悲だといふ。慈なるが故に悲です。慈は愛である、愛は悲である。故に大慈悲といふは、大愛であり、大苦であるのであります。維摩居士が一切衆生が病むが故に我病むといふやうに、一切衆生を一子のやうに憐念する佛には、常に心の苦痛が堪へないのであります。愛の心が深ければ深いだけに、心あつかいも多く、苦痛も深刻なのであります。だから大慈悲の佛は大苦惱の人であるにちがひない。

私は常に愛によりてなやみます。私の心に愛があるので、私は身も世もあられぬやうな苦痛もします。私の心に愛さへなければ、人生のすべての問題はさら〳〵として片づいてゆくのではあるが、愛のあるばかりに、なか〳〵さら〳〵と片づかず

して、どうにもならぬはめに入りこんで、泣きまろぶ事がをり〳〵あります。

然しこの愛は又、私に力をも與へます。命も與へます。愛はなやみをうむだけに、愛は力を與へます。貧を與へます。愛は私を闇黑に追ひやります。そうしてそこに深刻な光明を與へてくれます。苦痛を與へると同時に、それを忍ぶ力と命とを與へてくれます。

だから愛のある所に、大苦痛はあるけれど、愛のある所には、常にその大苦痛を忍び、大苦痛の中から生きてゆく命がわいてをるのであります。

故に人としても、愛執の深い人は苦痛が深い、それと同時に力があり、命がある。之に反して愛執の淺い人には、苦痛も少く、力も弱く、命も稀薄である。

愛のない所には沈痛な戰ひもなく、憎みもないが、愛のある所には沈痛な戰ひもある。憎みもある。愛のある者は、この戰ひの中に、この憎みの中に、力をふるひ、命にもえて、ます〳〵愛の燃燒に精進するのであります。

だからして人として愛執の淺い人はいはゆる失敗もなければ、不道德もない、夫と同時に性格の光明が稀薄である。之に反して愛執の深い人には、常に失敗があり、常に不道德がある。そうして彼自身と彼の周圍とが痛苦に泣きまろぶ事がある。しかし、彼には之にたへるだけの力があり、また命があるのであります。そうして彼には、この苦味以上な甘味もまたあるのであります。

他の問題の苦痛は、解決によりて取り去る事ができるが、愛の問題は、解決もつかねば、苦痛をとり去る事もできない。それが進めば進むほど、苦痛が大きくなるのであります。愛が深くなればなるほど苦しみがひどくなるのである。愛の甘味が加はれば加はる程、苦味が加はつてくるのであります。苦しみのない愛がないのは、辛くない唐辛がないやうなものである。愛する心は切ない、苦しい、そうして甘い。

熱愛の心は常に火聚に入り刀山に登るを辭しないのである。苦痛の逃避者は愛執の稀薄な人である。紅涙と溜息とは、愛執の苦痛に精進する者の有する姿であります。紅涙と溜息との味を知らぬ者の胸には愛の血は通うてゐないといひ得るのであります。

かくのごとく愛は苦痛ではあるが、愛の苦痛は決して人を忘らし、衰へさせ、死なす者ではなくて、反つて人はこの苦痛によりて力を得、この苦痛によりて常に蘇生し、この苦痛によりて常に若やぐのであります。で、愛の苦しみのある者には老と死とは襲うては來ないのであります。これが愛の苦痛の不可思議境とでもいふのであらう。

人達よ、愛せよ、苦しめよ、泣けよ、そうして精進せよ、蘇生せよ、常に若やけ、常に生きよ、大なる愛の世界よ。（一〇、一一、一六蒲郡にて）

五。自己の愛に精進する者

本年の親鸞聖人の御忌日を縁に、新らしい今の自分に、新らしう聖人の教を受けやうと思うて、『教行信證』をよんでゆくうちに、四五日以前に一つのあるヒントに接したから、夫れから思ひついた事をかいてみやうと思ひます。

『無量清淨平等覺經』卷上に言く、我作佛せん時、我名をして八方上下無數の佛國に聞えしめん。……阿闍世王太子及び五百の長者等無量清淨佛の二十四願を聞いて、皆大いに歡喜し、心中に勇躍して俱に願うて言く、爾れば我等復佛と作らん時、皆無量清淨佛の如くあらんと、佛則ち之を知らしめして、諸の比丘僧に告げたまはく、是の阿闍世王太子及び五百の長者子、無盡數劫の後、皆當に佛となりて、無量清淨佛の如くなるべしと。……

此の『平等覺經』の文を讀んで私はいろ〳〵のことをかんがへさせられました。

先づ第一に私の心を引いたのは、阿闍世王太子及び五百の長者等が、皆無量清淨佛の如くならんといふ願をおこしたといふ所にあります。私達はこれまで、佛は大慈悲の親であつて一子のやうに衆生を憐念したまふときくと、すぐ自分は子になりて、佛から愛せらるゝことばかりに心を傾けて、自ら佛のやうに慈悲に燃えたつて行かうとする心を起さないでゐたやうであります。佛の大慈の愛を聞いてその愛を受くる事にばかり心をとられて、自らその愛の世界に生れ出る事に忘つてゐたのであります。自ら佛に作らんといふ念願を起さないで、いつまでも衆生となりて佛から愛せられて行かうとしてゐました。そうして自分達を永遠の赤子であるとさへも信じやうとしてゐました。

佛の愛に賴らうとし、佛の愛を受けてのみ行かうとするので、佛の愛に對して、疑惑と躊躇とがおこつてくるのです。賴らうとし、受けやうとする心は、對者の心

を計らふやうになるのである。自分がこんなに淺ましいから、愛して貰へるかしらと案じ、いやその淺ましい奴を憐み愛し下さると思ひかへし、でもあまりひどいからごうであらうと危ぶみに入るといふあんばいになるのであります。惠まれやうとする心、愛されやうとする心には、いつでも對者の心を計らふ心と、對者と自分とを見比ぶる心とがつきまとうてまゐります。この心がいつも不安を呼び起し、疑惑を生み出し、そうしてつひには邪心に追ひこむやうになるのであります。

父親が子供の爲に、苦心慘憺して財を積んだとする。子供がこの父親の慈心を聞いて、父といふ者は何とした難有いものであらうかと、父の慈心に感謝し、父の恩惠に浴して、安泰を得やうとする時に、その父の恩に賴らうとする心、恩を單に受けこまうとする心から自然に、父の心を計らひ、自分と父とを比べものにし、はては父の壓迫をも感ずるやうになるのが自然であります。之に反して、父のその苦心を聞いて、我も父のやうに子孫の愛に盡瘁しやうといふ念を起し、父の恩を受けると

いふより、父の精神を受けて、自ら積極的に働き出す者には、常に勇氣があり、精進があり、自由があり、平和があつて、決して疑惑を抱いたり、壓迫を感じたりすることはなくなるのであります。

親を信ずることは、親の愛に甘へる心ではなくて、その精神に生きる心でなくてはならぬ。佛を信ずるといふことも、佛の慈悲を受けこむといふよりも、佛の慈悲の心に自ら生きてゆくことでなくてはならぬ。

私はこの事を戀愛の上にも考へてみたいのであります。近頃戀愛の問題として事實の上に見せられてゐるもの〻一つが、白蓮氏の離婚問題であり、他の一つは石原純氏の原阿佐緒氏との同棲問題であります。白蓮氏も阿佐緒氏も、先づ教養ある、新らしい心をもつた婦人というてよからう。この二人の近時發表した意見を驗してみると、略ぼ似通ふた心持を發見するのである。

白蓮氏が十年間夫婦契約の下に暮してゐた伊藤傳右衛門氏に對して離緣狀を送つ

て身を退いた。その離縁狀を見ると、夫傳右衛門氏は十年間夫婦でゐながらちつとも自分を愛してくれないから自分は身を引くといふやうにかいてある。原氏の石原氏と同棲するやうになつた道行きをかいた文を見ると、石原氏が純眞の愛を注いでくれらるゝ、その熱愛にほだされてつひに今日のやうになつたというてゐる。白蓮氏は夫が愛してくれないから去るというて、自分が夫を愛しきれなかつたとはいうてをらぬ。原氏は純氏が自分を愛してくれるからというて自分が愛したからなつたとはいうてをらぬ。一は別れた人であつて、一は逢ふた人ではあるが、共にその責任を男子の方にぬりつけやうとしてゐる所が似通うてをる。之は一種の責任逃避な言ひ分であるが、あるひは消極的な愛の所有者である事を告白したものであるかでなければならぬ。私は女といふ者は一般に自分で愛してゆく心ではなくて愛せられてゆかうとしてをるのではなからうかと考へる。古へからの傳習で女は男の所有物視せられてきたのが今日でも一般の女の頭腦にしみこんでゐるのではあるまいかと

思ふ。白蓮氏でも原氏でも共に傳習を破る底の心を持つてゐらしう思はるゝのであるが、そのいひ草をみると二人共にやはり傳習にまつはられてゐる女でしかないことを思はせらるゝのであります。白蓮氏はどうして、十年間傳右衛門氏を愛しやうと努力したが、たうとう愛しきれないことがわかつたといはないのだらうか。原氏はどうして自分の愛がたうとう通つて石原氏を自分の側に引きつけるやうになつたといはないのであらうか。そう感じないから仕方がないといふか。そんなら一層よくないと思ふ。日本の女でも、あの清姫のごときは積極的な愛に燃えたつて精進したのではあるが、大抵は男の愛に甘へやうとするのが多いのではあるまいか。尠くとも、原氏や、白蓮氏のごときはその部に屬する女達である。愛せられないから去るといひ、愛せられたから共になるといふのではなくて、愛することができぬから去る、愛したから共になつたといふやうであつてほしいと思ふ。

自分を熱愛してくれる人だから自分はあんまり彼を愛してはゐぬが、彼に身を托

するといふのがよいか。彼はあまり自分を愛してくれないらしいが、自分は彼を熱愛するから、彼に近づいてゆくといふのがよからうか。私は後者の男らしさを取らうとする者であります。正確にいはゞ、愛せられずして愛し得る事もあるまいし、愛せずして愛せらるゝ事もあるまい。愛する事と愛せらるゝ事とは同時ぢやなくてはなるまい。しかしこんな場合は至極尠いので、多くの場合はどちらかにかたよりがあるにきまつてゐる。そのかたよりのある場合に、私はどちらをとるかと考へてみると、私は愛する事に精進するのが正しい道だと決するのであります。

他が愛するか愛せぬかは他の問題であつて自分からは望み得るとしてもどうにもならぬ事である。然るに自分が愛する事は、自分に屬する事であるから、自分だけできまる事であります。だから、私達は先づ第一に自分の愛に精進せねばならぬと思ひます。他の愛に頼らうとするから、他の心を計らうて、愛してくれてゐるかしらん、愛してくれないのかしらんといふやうな危ぶみの心やら、捨てられはしまひ

かといふ恐れの心もおこるのである。それが自分の愛に精進してゆく者となると、自分の愛の光で愛する者を照らし、愛する者の心を熱せしめねばやまぬといふやうになるのだから、危ぶんだり、または恐れたりしてゐるひまに、自分の愛の表現に努力するのであります。

他人が自分を愛するときいて、愛せられることに落ちつかうとするのは、自ら賤しむことである。自ら愛の奴隷となる事である。私達は、他が自分を愛すると知る時には、その愛を受けこむよりも、その愛を感謝するよりも、自分の愛に精進せねばならぬのであります。愛せられてよい子となつてゐる事は、やはり愛の奴隷となり、愛の敗残者となるより外はないのである。夫に反して、愛する事に生きるものには、どこまでも退轉のない道が開かれてあるのである。積極的に愛に生きる者には失戀などはありやうがないのであります。私達は一歩づゝ自分の愛の歩みを進めて行かねばならぬのであります。愛する者の愛の心を自分の愛の火で燃やさにや止

まぬと不退轉の精進をする者には、愛の失望はないのであります。

愛せられてゐるか、愛せられてゐないかを問題にすべきではなくて、愛するか愛せぬかゞ問題とならねばならぬと思ふ。若し自分の愛する心が純ならば、どこまでも疑ひなく慮なく、その心の命ずるまゝ精進すべきであります。私達は自分の愛の上に充分の信をおく事によりてのみ、愛の所有者となる事ができるのであります。他の愛に賴らないで、自分の愛に生きるのです。そうです。自分の愛を信ずるのです。自分の愛を信じて純一に自分の愛に燃えたちて愛する者を攝取し、光耀し、燃燒して進まねばならぬのであります。私共は他の提燈で明りをとるやうな心を去りて自分の明りで周圍を照らす心で、愛の道を精進すべきであります。

佛の慈悲を聞いて、佛の慈悲に甘へて攝取せらるゝ事をよろこぶひまに、自分も佛の慈悲に生きてゆくこそ、眞に慈悲に攝取せらるゝ事になるのであります。先づ自分で第一歩を踏み出さねばならぬ。そうして第二歩も自分で踏み出さねばならぬ。

第三歩も、第四歩も自分で踏み出さねばならぬのであります。自分で踏み出す者は常に明白であります。平靜であります。精進であります、積極的なるこそ私達の眞實の生活相であるのであります。（一〇、一一、一六滿郡にて）

第四章　雜

一。子供の訓育に就て

これはある地方にあつた實話であります。ある郡立女學校へその郡の郡長が參觀に行きました。生徒に對して訓話をしたのです。その郡長は隨分地方音の酷い人なので、その音をきゝ馴れてゐない生徒達は話の中に笑ひ出しました。すると郡長さんが怒るまいことか、まつ赤になつて叱りつけた。話がすんでから教師達に對して平素の訓育が行き屆いてゐないというて責めたてたといふのです。私はこの話をきいて面白く思ひました。箸から落つる雫でさへをかしい娘ざかりの生徒達が變てこな方言をきいて笑ひこけた處がそれがどうしたといふのだらう。をかしな事をきいても笑はぬやうなものが、訓育の行き屆いてをるものだといふのだらうか。

私は女學校や中學校などにいつてお話する時に、彼等が憚かる處なく、笑ふたり、

泣いたりする、あの無邪氣な姿に打たれることがあるのです。田舍の會などにいつてをかしな事も笑ひもせず、笑うてはならぬといふ樣な顏をしてをるのをみると何となく張り合ひがぬけるやうに思ふのです。

この郡長さんとはまるで反對な感じを持つてをるのです。この郡長さんの考へでは教育することは笑ひたい時に笑はず、泣きたい時に泣かぬ、自己欺瞞の生活者とすることなんだらうか、郡長さんの威勢に恐れてかしこまつてをるのが教育の行屆いたといふのだらうか。こんな人達の心持は私などにはとても了解ができにくいやうであります。

私が人の家庭に入つて子供達が側にまゐりますと、柿や林檎などを二つも三つも並べて、どれでもおとりなさいといふとある家の子供は一番小さいのをとります。ある家の子供は一番大きいのをとります。その小さいのをとる子供はお行儀のよい、しつけのよい子といはれてをります。その大なるのをとる子を野育ちの教育のない

子供だとせられてをります。

私はどちらかといふと小さなのをとる子よりも大きなのをとる子の方が可愛らしいのです。こせ〳〵しないでよいやうに思ひます。小さいのをとるのは天性の儘ではなくて、人は他に讓るべきものであるといふいはゆる奉仕的なる規矩をきめてをるやうに見ゆるのであります。小さいのがほしいから小さいのをとるといふのならよいが、大きなのがほしいのだが人の道としては小さなのをとるべきであるといふやうなのは、人の性をそこなふ教育法といはねばなりません。やはり子供は無邪氣に自分の願望のありのまゝを出すのがかわいらしくつてよいやうであります。子供ばかりではない大人になつてゐてもやはり欲しいものは欲しい、欲しくないものは欲しくないと、はつきりした方が尊いやうであります。

それがどんな高貴な人の前だとてをかしければ、笑へばよいではないか、をかしいのをこらへて笑はぬでゐるのは反つて、失禮になるではなからうか。私は自分も

他人も欺かぬありのまゝな生活がしたいと思うてゐます。だから子供の教育にもなるべく、自分を欺かず、つくろはぬやうに本眞のまゝ赤裸々に生活するやうに、導いたらよいと思ひます。

子供でも大人でも、むやみに自分を欺いて、飾りたて、つくろいあはしてをるのは、卑しいことゝ思ひます。そんなこせ〳〵しないで、ごこまでものんびりと育つて行くのがよいやうに思ひます。

柔順に、率直に、純一に精進するやうに、人の子の魂をそだてゝ行くのが教育の能事であると思ひます。人を恐れず、人を憚からず、どんな場合にも自分を表はし、自分を通すのに、躊躇しない人程尊い者はないではありませんか。教育が抑々この大切な願望成就の人間の眞實道を汚すやうな事があるやうです。私はどうか、人格が自分を欺かぬやうに、率直に自分を表はして行くやうにありたいと切に念じつゝ、そんなやうに子供を導く教育を望んで止まない次第であります。（大正九、一一末）

二。垣を造る心

先日の暴風で後庭の板塀や竹垣がすつかり倒れたり、壊はれたりしたので、此頃は毎日大工と石やとがきて修理をしたり、新らしくこしらへたりしてゐます。私は毎日之をみてゐて、人間が塀をこしらへ、垣をつくる心はどんな心だらうかと考へてみるのです。

自分の住所の周圍に垣をこしらへるのは確に、自分と他人との隔たりをこしらへやうとするのだ。他人から犯されないやうに自分を守らうとする心なのだ。私達にはなるだけ廣い土地に住みたいといふ心がある。それになるべく狹くこぢこもらうとする心もある。垣をこしらへる心は、狹くこぢこもる心であり、まさしく城廓をつくる考であります。

これまで竹で垣をこしらへてあつた所へ、今度板塀をする事にしました。その私の心持ちには竹垣だと外から見すかされるから、外から見すかされぬやうに板塀をこしらへやうとするといふ心が主になつてゐるやうだ。この心も面白い心です。他から見すかされてはどうわるいのか、他から見られてわるい事をやつてゐるのではないでないかと考へてゆくと、何だか妙な考へになります。とにかく、私には他から見すかされたくないといふ心があることだけが明かになるのです。

板塀をこしらへる所に外へはぐみ出るやうになつてゐる一本の木があります。之をきらねば板塀がまつすぐにできぬので大工は之をきつて下さいといひ出した。生きた木を切つて、板塀をするのかと私は考へた。そうせねば、みつともないからといひ、便宜がわるいからと大工はいふたのです。私はみえの爲に、便宜の爲に、庭木もきらねばならぬのかと考へてみた、そうして、たうとう切らないで、板塀をきりあけておく事にしました。

私達の實際生活の上に、板塀の見えをする爲に、生きた木を切るやうな事をしてはゐないかどうかと考へてみると、こんな事を屢々やつてゐるので、ぞつとするといふよりもをかしくなつてきました。

いつぞや大阪の友人の家を訪ねまはつた折に感じた事ですが、その家は財産の多くなるに隨うて、塀の高さと堅固さがましてくるやうなのに、妙な氣がした事があります。貧乏人は住む所に垣をしないからいはゞ廣い世界に住んでゐるのに、財産家は垣をこしらへて狹い所に住んでゐるのです。しまひには塀の上に恐ろしい釘をうつたり、硝子のかけを植ゑつけたりしてあるのもあり、もつと甚だしうなると、門前に請願巡査をおいてある家があります。かうなるとよほど自繩自縛になります。それをみた折に私は思ひました。あんまり人の欲しがるものを自分で持つてゐる罰で、こんなに窮屈な中にとぢ籠つてゐなければならぬのだなと、自ら狹い世界をこしらへる人の心をいやに思ふた事があるのでありました。

今自分が板塀をこしらへてゐるとふとこの事などが思ひ出されて私もやはりブルヂョアなんだと思ひました。

丁度此頃『華嚴經』をよんでゐるので、『如來には所依なし、所住なし、所有なし』と毎日のやうによんでゐつゝ、板塀をこしらへてゐる自分の姿がをかしくてならないのです。人間には、いや私には廣い世界に一寸何とか圍ひをこしらへてみたいのです。あんまり廣い家に、圍ひなしに皆が住まなくて皆々が自分の室をもちたい心、ふすまで境せられてあるより壁で境せられてゐる室の方がすみやすい心も同じなのであります。宿屋にとまつてあまり隣室の近いのがいやなのと同じ心の働きなのであります。私には誰とでも垣をとりて溶け合ひたい心があると共に、誰ともある隔たりを持つてゐたい心とがあるやうであります。金のある者は塀を高くし、男女二人で泊る宿屋では離座敷を要求するのはどんなものだらうか、之もやはりブルヂョア根性なんでせう。

私は全然垣をとり去つた所に住む程な心をもつてゐないが、垣をこしらへてもそれはほんの假のものであり、何時でもとりこぼたるゝものであるといふ輕い氣持ちでゐたいと思ふ。

世の中に禮儀とか道德とかいふ事のあるのは、この垣する心が元ではあるまいか。『長幼序あり』といひ、『夫婦別あり』といふなどは、隔たる心の上に道を味うてある言葉ではあるまいか。君臣あり、親子あり、夫婦あり、この對峙の上に道を語るのは、垣をこしらへ、この垣を越えぬやうにするといふ心得ではあるまいか。それが妙にこだはつて、つひには垣の爲に生木を切るやうになつたり、どんな親密になつても垣のこぼたれないやうな利己主義者になり終る事があるのであります。

狹い家に住みたい心と、廣い家に住みたい心とが私には確かにある。狹い家に住みたい心は個人性が主となつてゐる。廣い家に住みたい心は社會性が主となつてゐる。廣い家がほしい時は、お客の事などや會の事などを考へての事である。狹い家

に住みたいのは、人がきてうるさかつたり掃除がいやだつたりする時におこる心であります。私などはこの二つの心が折々おこるのであります。

垣をする心は狭い家に住みたいのであり、獨り自ら強うせんとする心でもあり、獨り自ら安らかならんとの心でもある。垣をとり去らうとする心は、衆と共に樂まうとする心、社會的に賑やかに暮したいといふ心なのであります。垣をこしらへる心は狭い心であり、ケチな心である。垣を撤する心は廣い心であり、くつろいだ心であります。私はやはり、この垣をこしらへる心から、垣を撤する心に進みたいとひたすら念じてをるのであります。

そうしてゐつゝ、私は今垣をこしらへてゐます。戸障子のある家にすんでゐます襖の境界や壁の境界のある家に住んでゐます。そうして夫れをいやとも思うてゐません。所有物でも、自分のものと他人のものとの混雜をさけたい心があります。自分の地所と他人の地所との區別を明かにしたい心があります。そうして之をいやと

は思はないばかりか、之のないのをいやだと思うてゐます。只私は之は假のものであり、一時のものであつて生命の火のもゆる所には燒き盡されねばならぬものである事を忘れない樣にしたいと思うてゐます。

垣もこしらへやう、時には何時でもとりこぼつ量見で垣をこしらへやう、三界は吾有也といふやうになると垣はいらぬ。この垣のいらぬ心に假に垣をこしらへてゆくのが私の姿であると思うてゐます。

國家といふのも一種の垣ではないか。民族といふのも一種の垣ではないか。何教の何宗のといふのも一種の垣ではないか。金をためるのも、學問をするのも垣をする心ではあるまいか。他と溶け合ひたい愛の心から生れてゐる宗教や藝術にまでそれが垣となるのがをかしいやうであります。垣はやはり卵の殼であります。暫く休らふ爲に入用なので、働く者には邪魔物なのであります。

昔から垣を越ゆる事はよくない事とせられてゐます。しかし私は垣を越ゆること

のよくないときめる人のするやうな垣なら、之をこしらへる事もよくないと思ひます。垣は時には越えてもよい、時にはこはしてもよい、やりかへてもよい垣のいらぬ程に自分の世界が廣められたら猶よいのだ。私等は垣になづまぬやうにせねばならぬのです。この心さへあれば垣をこしらへ、狹い所に休んでみたり、之を越して廣い世界に出て働いたりする事もなか〳〵面白い事だと思ひます。（一〇、一、〇六）

三。大谷派の現狀に就て

（親しいお友達の方々へ）

一

私は大谷派の寺に生れたものであり、中學も大學も宗門の教育を受けた者であり、學校を終りて後十年ばかりは宗門から養はれて修學してゐた者であることは、管々しいふまでもないことである。從つて私が大谷派のことに心の動くのも偶然ではないのである。私が宗門のことを憂ふるやうになつたのは、もう三十年程前のことである。二十六年前に清澤師等と共に宗門改進の叫びをあげてから後二十年程の間、私は宗門のことが常に念頭を去らなかつた。夫が五六年前から、今の宗門に絶望し

たばかりではなく、根蔕的に團體としては宗門に意義を認めないやうになつてからは、宗門のことには隨分無頓着になつてゐる。大谷派、本願寺派、佛教、キリスト教といふことが私には、何の異つた響きも與へぬやうになつてゐる。でも大谷派には、之までの私の知己が澤山ゐる。その樞要な地位にゐる人の多數は知人である。嘗て師であつた人もある。先輩の友であつた人もあり、後輩の友であつた人もあり、中には親しい友人もをるのである。それに大谷家一門の方々には光瑩老師だけにはお目にかゝつた事はないが、その他の方々には隨分いはゆる知遇を辱うしてゐる程である。特に光演師に對し、瑩誠、瑩亮二師に對して、今日でも、溫かい感じを持つてゐる。かうしたわけで私は大谷派を自分の宗門としてよりも、親しい友達のやつてゐる仕事として一種の深いなつかしみをもつてゐるのである。かうした心から私はこの文を草するのである。既に絶望してゐる宗門の事ですから、豆腐にかすがひ鰊に釘のやうに思うていふ元氣さへなかつたのであるが、いくたびかいふたことて

だめな事だと思ひ靜めてみても、何だかいひたくてならなくなつたから『中外』紙上を借りて、私のいひたい事をいうて舊い友達の方々に聞いて頂かうと思ふのである。既に團體的な運動を嫌ひすてた私の事ですから、こんな事をかいて輿論をこしらへて、宗門改革の運動を起さうとも思はねば、之から諸師のやらるゝ事に妨害を加へやうとも思うてはをらぬ。いや今の私にはそんな時間がないので、ほんのこれだけかく時間さへ惜しい位なのである。

二

私が宗門といふものに對して絶望的な考を持つやうになつたことを始めにいはねばならぬ。それには二つの段落がある。第一には私が氣づくやうになつてから後の大谷派の狀勢からして、どうせ誰がやつてみた所がだめなんだと思ふやうになつた。第二には、もつと進んで、今日の宗門そのものゝ根元から宗祖の意志に背いてゐる

のだと思ふやうになつた。かやうにして今日の私はひとり大谷派のみではなく、各宗、各宗教のすべてをいかゞはしいまやかしものだと思ふやうになつてゐるのである。

私が覺えてから、大谷派の寺務上に樞要の地位を占めた人々は、渥美契縁、石川舜台、篠原順明、瓏經丸、大谷瑩誠、阿部慧水、稻葉昌丸等の諸師である。

之等の人達には皆逢うて知つてゐる。個人としては立派な人達であつて、その人々の意見には相應に眞面目な所があるのであるが、一度此等の人々が宗門の要路にたつて事をやると、いつも眞面目な事ができないのであつた。兩堂の再建、大門の建築、大中學の建設、幾多の人材養成、こんな事業の功績は殘つてはゐるが、之等と同時に、門末に殘した惡影響は、この功に報いるにはあまりに大なる罪であつた。之等の人々は皆宗門の困つた團體である事や、本願寺寺務所が一種の魔窟であることを歎じてゐない者がないのでありながら、彼等自身が軍配をふるやうになつても、

ちつともかはらぬことばかりやつてゐる。

では管長が惡いのかといふと、そうでもない、光瑩老師が退かれて、光演師になつたとて別に異りはないではないか。二師自身さへ宗門の腐敗を常に歎じてゐらるゝではないか。では宗門は誰がよくし、誰がわるくするのであるか。誰がやつても宗門は依然として、ちつとばかり形式がかはつてゐても、依然としてこの宗門根性は改まらぬのである。大谷家、本願寺、末寺、門徒、こんな道具建てを以て組みあげた宗門といふ團體は、誰が出て、どうやつてみた所が、どうにもならぬ程に病が深うなつてゐるのである。少し譯のわかつた者なら、誰だつてこの事に氣づいてゐない者はないのだが、それだのに、いろ〳〵の甘味も殘つてをる所から、どうにかせねばならぬと思ひ、どうにかならぬものかと思うてゐる者も少くはない。

宗門を利用して利己心を滿足しやうとしてゐる鼠輩の事はいふの用はないが、少し眞面目に考へてゐる人達でも、また意々としてゐる所があるらしい。どうにかし

たらよくなられぬか、こにかく、こんなに大きな團體があるのだから、之を利用してやつたらよい仕事もできるだらうにと、この團體力や金錢力に眼をつけて、この宗門の仕事に携づてゐる人もあり理想の僧團こやらに近づかしめやうと努力してゐる者もある。(彼等がいふが如く、潔白なものとして)が、大多數は單なる因襲に引きづられて、その日その日を過してゐるやうなのが多いのではなからうか。

誰が今日の宗門の赫たる望の光を認め得る者があらうか。恐らく一人もあるまい。皆が困つた事だが、仕方がない仕方がないといひつゝ、自分の心にも許さぬことをやつてその日のがれの藝當をやつてをるのではないか。私が知つてゐる二十年餘りの間に出てきた人達の誰だつて徹底的にやりぬいた人がなかつた。始めは少しやつてみるが、すぐ後もごりをしてうまくやつてゆくやうになつてしまふのである。渥美、石川、篠原の諸師だつて皆始めの精神はよいのだが、つひふら〳〵となつて、本願寺式になつてしまふたやうである。誰かゞ代つてやつたらよくなるだらうと望

みを屬してゐる私は、いろ〳〵の先輩の方々がやつてゆかるゝのを見て誰がやつたつて、この舞臺では、到底ろくな仕事はできないといふ事を信ぜざるを得ないやうになつたのである。大谷派だの本願寺なごは、誰が出て、どんな事をやつてみた所が、それが眞面目な宗祖の精神にふさうやうになる事はないと斷定するに私は憚らないのを悲しむのである。之はどうしたものだらうか。

此疑問を解くには勢ひ第二の問題に移らねばならぬ。夫は團體としての宗門そのものが宗祖の精神から生れたものではなくて、覺如、蓮如の二師の方寸からあみ出されたものであつて、それが後代になつて、特に教如以後になつて本願寺が大名のやうな生活をするやうになり、德川の保護のもとに勢力を張るやうになつてからは、ます〳〵あのいた〳〵しい宗祖の人間らしい精神が去つて、一種の社會運動の敵のやうになつてしまつたものなのである。

だからこの敵の中にどんな人が這入つてみた所が、敵以上の事は何にもやれぬの

である。若し思ひきつて眞面目にやらうとすれば數百年來養うてきた敵が破壞せらるゝやうになるから、敵の中の人達は之を恐れて、敵を破らうとする者をその敵から追出すに違ひない。

大谷派といふ團體が宗祖の精神にふさはぬばかりではない。どんな宗教でも何々宗と銘うつて世に出るやうになる時分には、既に宗祖から離れたものになり終つてゐるのである。之はたゞ大谷派のみに限られた事ではないのである。のだからして私は、それが佛教だらうが、キリスト教だらうが、眞宗だらうが、禪宗だらうが、本願寺派だらうが、大谷派だらうが、すべての宗門の上に尊敬を置く事ができなくなつてゐる。寧ろ之等を不眞面目な、謂はゞ人間には反つて有害な社會現象としか私に思はれないのである。

三

こんな心の立場になつてゐる私は、大谷派の事などには、こゝ五六年の間あまり心を費やさないやうにし、嘴も入れないやうになつてゐるのであるのだが、でも親しい知己の多くある大谷派の事だから、近來のあまりな破綻を見て、默するに忍びなくなつたから、思ふだけを披瀝して、諸師の心に聞いてほしいと思ひたつたのである。

四

去年の春の頃七十萬圓の内債を表で返濟せよ、そうはできぬ、いや、して貰はねばならぬといふやうなすつたもんだといふごて〳〵があつて、稻葉師は去つてしまひ、阿部師は之を表で返濟するといふ條件で事務所を引き受けた。そうしてこれを仕遂げる爲に内事建築の名の下に光演師の繪と書とを賣つて（名前はそうでないけれど實際はそうなのだ）百萬圓こしらへる事として、之を世に發表した。之がどん

な成績になつたか私は知らぬが、あんまり面白い運びにこ行かぬのではなからうか。そこで思ひついたのは、開宗七百年記念法要こいふ新らしい法要である。代々の宗内の事務者は法要をつこめて金を集むるに成功してきた。私の記憶に存する者では、兩堂の上棟式、遷佛遷座式、蓮如上人四百回忌、顯如上人記念法要、大門供養會、宗祖聖人六百五十回忌、大谷六百五十年忌等はその主なるものであつた。夫れ等の法要で、比較的容易に金の集つた事を知つてゐる宗門の當局者は立教開宗の七百年記念法要をやつて五百萬圓の勸財をする事を發表した。

立教開宗の記念法要こよ。これ既に親鸞聖人の宗門こしては無意義な法要である。聖人五十二歳の時に稻田の草庵にて『教行信證文類』をお書きになつたのを記念して、立教開宗の記念をせねばならぬこいひ出したのは、今から二十年程前東京で、齋藤唯信師なごがいひ出した事である。私は思ふ。何宗こもなき念佛者親鸞に開宗立教がごれほご大切であるか。是非知らず、邪正もわからぬ諸師にごこに仰々しい立

教開宗があるか。そりや『教行信證文類』の初に、『謹んで淨土眞宗を按ずるに二種の廻向あり云々』こいひ、『教こいへば大無量壽經之れなり』こ宣言せられた所に、開宗の心があつたこいへばいはるゝが、親鸞聖人には、聖道門に對して淨土門を開いた法然聖人のやうな心はなかつた。念佛に對して題目の宗教を開いた日蓮のやうな心もなかつた。聖人はごこまでも宗教家こいふよりも、生活者であつた。從つて聖人には立教開宗こいふやうな仰々しい事はなかつたのだ。

覺如上人や蓮如上人には、この仰々しい立教開宗の心はあつた。本願寺の聖人こいひ、當流聖人こいふやうになつて、親鸞を御開山こいふやうになつたのは、親鸞御自身では御存じのない事であつて、聖人にこつては迷惑な事であつたやうに思ふ。こんな考へを持つてをる私には宗門が立教開宗の記念法要をやるのは、相對的な宗門こしては、當然かもしれぬが、絶對的の宗門こしては何の要もない事である。開宗記念の法要を發表してから『宗教』の上で、宗門の名師(?)達の立教開宗の意見や

『教行信證』の研究を發展する事は結構な事である。

板東の御眞本を石版に附するといふ計畫もよい事である。しかし當局が之をやる所の精神は果して清淨なものだらうか。

聞く所によるとこの法要の費用として五百萬圓を要するといふ。夫はよいとしてこの五百萬圓を集めるのにどんな方法をとるかゞ問題である。當局は之を集めるに二方策をとるらしい。その一は僧侶の堂班衣體の賣却である。その二は門徒へ祠堂金をあげさす事であるといふ。僧侶の堂班衣體は、之まで隨分賣られてきた。

之を賣る事は本山としてはよい財源である。けれども之によりて地方の僧侶がいかに非宗教的に導かれつゝあるかは、當局者は已に知つてゐる事であるのだ。之を知つてをりつゝ、金を集めるにはこの手でないとだめだといふ考から、今度もこんな方策を取つたのではないか。之をやる當局者も當局者だが之を發表せしめた門末の僧侶もひどうみくびられたものといはねばならぬ。

それから祠堂經である。祠堂經で金をあげさす方針は、渥美師が醍德會をやり出した頃からだん〳〵奬勵せられたもので、須彌壇納骨だとか、大谷經だとかいうて、相續講や、御遠忌志にも、この條件を加へて上納金を奬勵したものであつたが、今度も亦いよ〳〵之を明白にして盛んに奬勵するといふのである。宗教の精神のどこを掘つたら祠堂經奬勵の心が湧いてくるのか。之を訂すさへ愚の至りである。關東の寺を逃れてひそかに上洛せられた宗祖の魂に、どうしてこんな祠堂經奬勵のやうな心があらうものか。

こんな事を見ると、宗祖の立教開宗の法要をやるに就て集金をする、その集金は立教開宗の精神に背いてゐるとすれば、法要をつとむるのは果して何の爲めになるのか。かうして金さへ集ればよい事ができるではないかといふ者もあるかもしれんが、それはあまりに功利的な考へである。宗祖のいやがられさうな事をやつて金を集めて宗祖の法要を修して、それが何にならう。そんなことなら寧ろ始めからやら

ぬがよい。

立教開宗の法要はその性質上よくない事ではあるが、夫を一歩譲るとするも、それをやる爲に堂班衣體の賣却と祠堂經の奬勵で集金するとは言語道斷である。殆んど本氣の沙汰とは思はれぬ程不眞面目極まる所行ではないか。そうせねば金が集まらぬといふか。集まらなけりや、正當に募財して集つたゞけの法要をやればよいぢやないか。そんな惡辣な方策をしてまで金を集めて、どんな盛大な法要がつとまつたとて夫が何にならう。今の本山の寺務をやつてゐる諸師はそんな事がわらかぬ愚物ではないのだ。よく判つてゐつゝ、凄い微笑を漏らしつゝ敢て非をやつてゐるのではあるまいか。

記念傳道とやらの爲めと南條師始め、所謂德の高き方々が各地に出張しつゝある樣子だが、南條師はこんな事をどう思うてゐらるゝのですか。わしは教學の事だけいふ、金の事は知らぬと逃げてゐらるゝやうですが、ほんたうにあなたは金の事は御

存知ないのですか。あなたの信じてゐなさる佛の前にてそれを公言して恥ぢないのですか。知つて知らぬふりをしつゝ、人の非を遂ぐるのに、働いてゐらるゝのを見ては、師の德に就ても私は疑はずにゐられないのである。

いつの世だつて、不眞面目であつてよい時はないけれど、今日は特に眞面目に働かねばならぬ時ではあるまいか。佛名を口にし、親鸞を慕うてゐる同朋同僚は特にもつともつと眞劍に考ふべきではないか。今日に至りてもまだ、堂班衣體の賣却や祠堂經奬勵のやうな罪深い所作を宗門の名の下になさねばならぬのか。

尠く共私は(名を宗門の末寺の一組織に列ねてゐるのだが)そんな淺ましい事に賛成する事はできぬ。だから私はそんなつまらぬまねは斷じてしない事を期してをる。

私は、宗門内にある私の親しい友人達に心から勸める。どうかもつと諸君は、諸君自身の爲に眞面目になつて下さい。もつともつとイエスとノーとをはつきりいひきるやうに眞劍になつて下さい。

自覺の眼を開くのです。もつともつと眞劍になつて各個の胸中に立教開宗のできるやうにならねばならぬ。一度この宗門が個人的に解體した上でなくては、眞實の僧團などは思ひもよらぬ事であると思ふのである。私自身はどうかそんな渦卷の中にはいらぬやうに、なまぬるい妥協をしないやうに、勇猛精進して、かの眞實の生活者たる親鸞聖人の後を慕ひたいと念じてゐる。

今私が書いてきたやうな事は、決して珍らしい事ではなく、誰でもわかつてゐる事であるのだが、わかつてゐつゝ、あまり平氣で之に從はんとしてゐるヅルさを默ず事に忍びずして一言させて貰ふた次第である。（一〇、一〇。八）

四。二人の俊寛の最後

一

清盛といふ一人の徹底的な生活者がゐた爲に、彼の政をやつてゐた時代の私達の同朋の間には、尠からぬ詩的情熱がみなぎつてゐた。或方面から觀察すると、法然、日蓮、親鸞、道元等の出世したのも清盛の感化がなかつたとゞうして思はれやう。それはさておき。

平家の時代に於て、多くの悲喜劇があつたその中で、彼の俊寛僧都の鬼界ヶ島の流人として果てた事は、私共同朋の血を湧かし、涙を催さしむる事件の一つである。鹿ヶ谷の陰謀が露顯した爲に、北條成經、康賴法師、俊寛僧都の三人は清盛の爲に

南海の孤島鬼界ヶ島に流罪こせられた。あくる年に成經こ康賴こは中宮の御產の祈禱の爲に赦免こなつたのに、俊寛僧都だけが島に殘された。俊寛は元來清盛の郎黨であつただけに、一層深く清盛の惡みをうけたものであらう。俊寛は一人島に殘され、次の年にも成經か守賴が迎ひにでもきてくれるかこ思うて命を延べてまつてゐるのに、迎へには來ない。そこへ召使であつた有王こいふ青年が遙に島に尋ねきて、京にて一人の六歳になる男の兒も、北の方も果てられたこをきゝ、自ら食を絕つて自盡したこ傳へられてゐる。この俊寛の最後が人をして泣かせもし、または考へもせしむる所なのである。

昔から隨分この鬼界ヶ島の俊寛の最後が藝術の題材こせられてきた。その最初の記事は『平家物語』であるのはいふまでもないここである。

近來になつて、この俊寛の最後を題材こした戲曲が書かれた。それは倉田百三氏の作つたもので本年の春東京で上演せられた所が、此頃、菊池寛氏が俊寛の最後を

題材こして一の小說を書いた。私は『平家物語』に現はれてをる俊寛の最後こ、倉田氏の『俊寛』に於て現はされてある俊寛の最後こ、菊池氏の『俊寛』に於て現はされてをる俊寛の最後こ、この三つの俊寛の最後の姿を見て、考へしめられたので、ついこの論文をかく氣になつたのである。

勿論私は之を歷史上の事件こして考へたのではなく、人間こして、いや自分が俊寛ならばこ考へて、自分の中にある俊寛は果してごんなであらうかこ考へてゐたのである。だから、之からかく事は、私自身がこんな境地に置かれたら果してごんなになるだらうかこいふ事を考へてみたいこ思ひたつたのである。

二

自分の考を諸君も共に考へて頂くために、私は『平家物語』こ倉田氏の『俊寛』こ菊池氏の『俊寛』この上に現はれてをる俊寛の最後の概略を記さねばならぬ。